
名探偵の子どもたち ～四姉妹と一匹の日常～

楽山やくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵の子どもたち　　（四姉妹と一匹の日常）

【Nコード】

N4544P

【作者名】

楽山やくら

【あらすじ】

伝説的名探偵夫婦・西ノ宮夫妻が亡くなってから五年――四人の子どもたちと一匹の猫は、それぞれにちよつとだけ不思議な日常を生きていた。四つの短編からなる、プチミステリーなほのぼの家物語。

『プロローグ』にゃあの日常・前

ワガハイは有能な猫である。

名前は『にゃあ』という。

けして鳴き声ではない。

ダイの大人ふたりがヒタイをつきあわせ、三十秒間にもおよぶ話しあいの末決められた、由緒正しき(?)名前なのだ。

ではワガハイがどれくらい有能かというと、あの伝説的名探偵夫婦・西ノ宮夫妻が助手として認めたほどである。

——そう、ワガハイに名前をつけたのもこのふたり。ワガハイの能力を真に認めてくれたからこそふたりは、所有の証である名前をくれたのだった。

だが哀しいことに、ふたりはもうこの世にはいない。五年前、あまりにも悲惨な交通事故で亡くなってしまったのだ。そして残されたものは、ワガハイが寢床にしているこの探偵事務所の看板と——四人の子どもたち。しかも、揃いも揃って女である。

長女・一夏いちかは二十五歳の社会人。といっても、なにをするにも要領の悪いタチで、一般企業に面接に行くたびに落ちているので、いまだに基本はパートとアルバイトである。それでも妹たちのために昼夜を問わず一生懸命働く姿は、よだれなしには語れない。

次女・冬二とうじは十七歳の高校三年生。頼りにならない姉のせいだと言っているのか、おかげと言っているのか。名前が男っぽいのもあって、やたらとシッカリした性格に育ってしまった。むしろシッカリしすぎていて、ワガハイにとってはいちばんの天敵だ。家に入るとき足を拭かないと怒って追いかけてくるし、決められた場所以外でツメを研ぐと家に入れてもらえなくなる。——まあ、いざというときには最も頼りになるのもまた、事実なのだが。

三女・三春みつはるは十二歳の中学一年生。ヒッコミジアンでおとなしい性格ではあるが、ワガハイにとっては天使みたいな相手だ。なにし

ろ不用意にワガハイの尻尾をひっぱったりしない。おやつをくれる。他の三人はワガハイ『で』遊ぶというのに、三春だけはワガハイ『と』遊んでくれるのだ。三春となら結婚してもいいと、結構本気で思っていたりする。

最後に、四女・秋四あきよは八歳の小学二年生。近所のおばちゃんたちに『おしゃまな暴れん坊』と呼ばれ恐れられている、西ノ宮四姉妹の最終兵器である。秋四の発言には誰も逆らえず（もちろん、あまりのかわいらしさに、だ）、本人もそれをよくわかっているのか、さらにワガハイをかぶってアピールするのだ。もともと、歳のわりにはカティノジジョーというものもよくわかっていて、叶えることが不可能なワガママは言わない。——ワガハイ以外には！「一度死んだあと生き返って！」と無邪気な笑顔で告げられたときには、本当にどうしようかと思ったものだ。

こんな四人娘との生活は、だが意外にも、結構楽しい。名探偵の助手として活躍していたときのような、命をすり減らすほどの刺激などないが、それでもこの日常は充分スリリングだった。

——そう、探偵の仕事だって、辞めたわけではない。両親の形見だからと外されずに残っている『西ノ宮探偵事務所』の看板を頼りに、訪ねてくる客はまだいるのだ。そして四姉妹は、未熟ながらもそれぞれに探偵の素質を秘めていた。

これはそんな、四姉妹の日常をめぐる物語。

そしてそれを見守る、ワガハイの日常の物語だ。

【第1話】次女・冬二の日常―1

プリンにはロマンがある。

冬二とうじはそう思っていた。

食うか、食われるのかの世界。

いかにしてそれを手に入れるのかの世界。

冬二は特別プリンが好きなのではなかったが、そのプリンだけは特別だった。

――三時間目終了のチャイムは、戦争の始まりだ。

「よっし！ 行くぞ美希みきっ」

「はあい！」

勢いよく飛び出す女ふたり。だが他の教室からも、敵は次々に飛び出してくる。

（ちっ、今日は場所が悪かったなあ）

移動教室で一階にいれば、購買に近いからラッキーなのだが、あいにくと今日は自分たちの教室、三階だ。まさか窓から飛びおるわけにもいかないし……ハンデは相当なものだった。

急ぐみんなのお目当ては、限定二十個の極うまプリン。それはこの女子高限定商品で、そのうまさは食い意地のはった冬二が毎日食べたいと思うほどである。

階段の手すりを何度もすべりおりて、廊下を走る。購買は玄関の近くにあるのだ。

（あの角を曲がれば……！）

校内でも一位二位を争う冬二の足。もしかしたら間に合うかもしれないという思いで、冬二は勢いを緩めないままその角を曲がった。

――のが、まずかった。

「うわあっ」

「ぐお」

見事誰かに当たって、跳ね返されてしまったのだ。後ろに転がっ

た冬二を、一緒に走っていた美希がひよいとよける。

（こ、この弾力性はっ）

あまり考えたくはないが、思い当たる人物がいた。以前も似たような状況になったことがあるからだ。

冬二はおそろるおそろる身体を起こした。仁王立ちしている人物と、目が合う。

「にーしーのーみーやあー」

妙にガタイのいい地学教師・安藤が、鬼の形相をこちらに向けていた。安藤はその身体の大きさから、『ぬりかべ』と呼ばれている。「わ、わりい先生っ」

（仕方ない、ここは逃げよう！）

まわれ右をした冬二は、やってきたときと同じくらいのスピードで走り去った。どうせちらりと見た感じ、購買にはすでに二十人以上の人がいた。プリンは売り切れていることだろう。

「こら！ 廊下は走るなッ」

美希と一緒に、後ろから声が追いかけてくる。当然とまるはずはない。

おりるときは手すりをすべって楽チンだった階段を、今度は二段抜かしで駆けあがっていく。さすがに三階まで一気にいくと息が切れて、あがりきったところで倒れこんでしまった。

「ちょっと冬二、大丈夫う？」

冬二よりものんびりとあがってきた美希は、陸上で長距離をやっているのも、そもそも冬二より体力があるのだった。

「はあ、はあ、はあ……ああ、大丈夫っ」

息を整えてから、勢いをつけて身体を起こす。美希が手を差し伸べてくれたので、ありがたく借りて立ちあがった。

「まったく、ついてなかったな」

あんな場所に安藤がいるなんて。もしや自分の行動パターンを読まれているのではないか？ と冬二は思った。なにせ最近、安藤は冬二を捕まえようと必死なのだ。冬二がすぐに逃げてしまうから。

「でもまあ心配しなくても、どうせ今日もプリン食べられるんじゃないの？」

今度は歩いて教室に戻りながら、美希が苦笑した。

「そうだろうけどさ。俺だってたまには、自分の手でゲットしたいんだよ」

「そういうところ、昔っから変わらないわよね」

「悪かったなっ」

「別に悪いなんて言っていないじゃない」

「でも——」

冬二は、続けようとした言葉を途中でやめた。冬二たちのクラス、三年二組の教室の入口のところに、少しの人だかりができていたからだ。

「あ！ 冬二先輩来たっつ」

「待ってたんですよ！ はいっ、このプリン食べてくださーい（はあと）」

「これもこれも！」

「先輩のために買ってきたんですう」

それが冬二のファンだとすぐにわかったのは、いつものことだからだ。

「あ、ありがとう……」

慣れている冬二は、複雑に思いながらも笑顔を返した。

（まさか、自分で買いたいから買わないでくれなんて、言えないしなあ）

また明日、頑張るしかないようだ。



小学校にあがる前までは、こんな冬二も普通の女の子だった。スカートをはいていたし、髪を伸ばして結っていた。近所でも評判のかわいいさだった。

そんな冬二が変わってしまったのは、小学校に入り、男の子のようなこの名前を馬鹿にされるようになってから。

（女なのに、冬二なんてな）

いじめのエサにしかならなかった。

それに屈しないためには、男になるしかなかったのだ。

以来冬二は、髪を短く切り、いつもズボンをはいて、男っぽい言葉を使うようになった。自然と態度も荒くなり、それを心配した姉の一夏が女子高に通うことを提案したくらいだ。姉思いの冬二はそれを受け入れここに通いはじめたのだが、冬二は女らしくなるどころかよけいに男らしくなり、すっかりアイドル的存在になってしまったのだった。

「――で？ 今日はいくつもらったのよ？」

やっとファンたちから解放されて席に着くと、呆れたような声で美希が訊いてきた。

冬二は親指だけ折った右手を、美希の目の前に差し出す。

「四つ！？ はぁ、さすがねえ……」

「大丈夫、一気に全部は食べないさ」

「そういう問題じゃなくてね。……ま、いいけど」
机を向かい合わせにくっつけて、美希は自分の弁当を広げはじめた。

このサバサバした美希の性格を、冬二は気に入っていた。人気者の冬二のせいで、美希がファンの嫉妬対象になることも少なくはない。それで嫌がらせをされることもあるはずなのに、美希はまったく気にしない。冬二に対しても、みんなのように一歩引いたつきあいではなく、普通の友人としてつきあってくれるのだ。

だから冬二は、美希には結構甘かった。

「ひとつあげようか？ 美希」

「やめてよ、あんたのファンに呪われる」

心底嫌そうな顔をした美希に、思わず笑ってしまう。

「もう呪われてると思うけどね」

「あら、誰のせいかしら？」

責めるような言葉を口にしつつ、美希の顔も笑っていた。

「それにしても、ぬりかべもしつこいわねえ」

「うん……」

不意に表情を戻した美希がそんなことを言ったのは、さっき安藤と会ったことを思い出したからだろう。

「まだあんたに大学行かせたがってるの？」

「そ。学校ではあいつに言われ、家ではナツに言われ、ほんと鬱陶しいったらないぜ」

「ああ、そっか。お姉さんにも言われてるのねえ。——あれ？でも冬二って、そろそろ部活引退するんじゃないかってっけ？」

自分でつくった弁当を広げながら、冬二は頷いて答える。

「ちようどいい機会だと思ってさ。今までナツに頼りすぎだったから、もうちょっと家のこと手伝ってみようかと」

それが冬二の本心だった。当然ながらまだ、一夏には伝えていない。なんだか気恥ずかしくて、伝えられなかった。

（どうせまた大学行く行かないって、ケンカになるだろうしな）

冬二より七歳も年上の一夏は、両親が亡くなってからは自分がんとかしようと必死に頑張っていた。働けるのが一夏だけだったこともあって、他のなにを犠牲にしても冬二たちを守ってくれた。

（でも俺はもう、守られているだけなんて嫌なんだ）

一夏が自分に、探偵として両親のあとを継ぐことを期待しているということは、わかっていた。冬二自身も、それを叶えることはやぶさかではない。だがその前に、冬二はみんなの役に立ちたかったのだ。

探偵である前に、家族のひとりとして——。

【第1話】次女・冬二の日常―2

すべての授業を終えたあと冬二は、右手にバッグを持ち、左手ではプリンの入った袋を振りまわしながら、第二体育館へと向かって歩いていた。陸上部の美希は、もうグラウンドのほうに行ってしまったので、今はひとりだ。

（部活終わったら、最後の一個を食うべよっと）

何度食べても飽きないこの味は、本当に素晴らしい。卒業する前に、なんとかレシピを教えてもらえないものかと、冬二はかなり本気で考えていたのだった。

（やっぱ色仕掛けかなあ）

薔薇の花を持っていくとか……

「――あ、あのっ、冬二先輩！」

「へっ？」

考えごとをしていた冬二は、突然かけられた声に変な返事をしてしまった。しかし、かかってきた声そのものも大層ひっくり返っていて変な声だったから、お互いさまだろう。

冬二が声のしたほうに顔を向けると、おさげ髪の子がひとり立っていた。

「なにかな？」

校内にファンクラブがあるほどの冬二だ、知らない生徒に声をかけられることなど日常茶飯事で、慣れているため愛想のいい笑顔で訊いてあげる。

「あっ、あっ、あのっ……あっ」

――と、その子の視線が、冬二の手に振りまわされている袋に注がれた。

「それ……プリン、ですか？」

「あ、これ？ そう、今日もらったやつ残りなんだ」

「そ、そうなんですか……じゃ、じゃあっ！」

「え？　ちよつと、きみっ」

女の子はそれだけ言うと、ものすごい勢いで走って行ってしまふ。

（んー？　なんだったんだ？）

気にはなるが、追いかけていってもあの子にとっては迷惑なことかもしれない。そう考えた冬二は、再び目的の方向に向かって歩きはじめた。

第二体育館は、東校舎一階から繋がっている。よって、体育館へ行くためには絶対通らねばならない渡り廊下がある。

――そして今日もまた、そこに安藤がいた。

（あいつは俺のストーカーか！？）

こんなとき、美希がいればうまく安藤を誘導してくれるのだが、いない場合は『彼女たち』を使うしかない。

冬二は足をとめると、辺りを見まわした。同時に何人かの生徒が足をとめて、さつと冬二から視線をそらす。言わずもがな、ついてきた冬二のファンたちだ。

「ちよつと頼まれてくれるかな？」

自分でもやりすぎかと思うくらいの笑顔を浮かべてやると、漫画みたいに目をハートマークにした彼女たちが近づいてきて。

「はいっ！　任せてくださいっ」

と声をそろえた。

あとは待つだけだ。

彼女たちは団体で安藤に近づいていくと、安藤を押しやってどこかに連れていってくれた。いつもはいかつい顔で睨むだけの安藤も、このときばかりはちよつと嬉しそうな顔をする。もしかしたらこれを期待して自分を待っているのかもしれないと、冬二はひとり笑った。

（さて、体育館に行くか）

ぬりかべのいなくなった廊下を、悠々と通って部活へと急いだ。



冬二は剣道部だ。

足腰が強いので、一緒に陸上をやらないかと美希に誘われたこともあったが、冬二はそれを断った。なぜなら、陸上では家族を守ることができないから。

（両親が死んで）

家に男手がなくなってしまった。いざというときに、家族を守るために戦える人がいないのだ。だから冬二は、剣道を始めた。最初の競技にしようか迷ったのだが、家族会議の末剣道が選ばれたのだった。

（やっぱり、心配性なんだよな）

剣道なら防具があるし、素手で戦うわけではないから女でも男と同等に戦える。そういう理由だった。末っ子の秋四はただカッコイイという理由で、賛成していたようだが。

冬二はみんなの期待に応えようと、一生懸命練習をしたし、一生懸命勉強もした。冬二にとってそれは、すべてが自分のためではなかった。

（なのに今、大学へ行けって言う）

自分のために、大学へ行けと。

安藤も一夏も、口をそろえて言うのだ。

だが、それは冬二にとって、どうしても領けないこと。なぜなら、最終的には家族のためになると言われても、まったく信じられないからだ。

（大学へ行けば、確かに知識は増えるだろう）

卒業できたら、いい会社に入れるのかもしれない。

でも、それがなんだ？　と思う。

冬二はお金を稼ぎたいわけではなかった。生きていくためには確かにそれも大事だが、それがあからといって幸せになれるとは限らない。むしろ、よけいなことに巻きこまれるかもしれない。

冬二は、幸せになりたかった。

みんなを、幸せにしてやりたかった。

そのために必要なのは、少なくとも冬二にとっては大学ではなかったのだ。

「――そこ、西ノ宮！ なにやってるの！？」

「はいっ、すみません！」

本番さながらの練習試合をしながら、冬二は考えごとをしていた。そのせいか、普段は負けたことのない後輩に負け、顧問の美袋みなぎに叱られてしまったのだった。

（まったく、なんで俺がこんなに悩まなきゃならないんだ！）

きつと、誰が悪いわけでもない。けれどイライラして腹が立って、とてもプリンを食べる気分ではなくなっていた。賞味期限はありがたいことに明日だ、冬二はそれを持って帰ると、ふたの部分に名前を書いて冷蔵庫にしまった。別に食べるのは自分でなくてもいいのだが、書いておかないと知らないうちにケンカになるのだ。

（あとでこっそり、アキにでもあげよう）

【第1話】次女・冬二の日常―3

機嫌の悪さは、『絶好調』だ。

「ほら西ノ宮、剣が乱暴になってるよっ」

翌日の放課後になっても、冬二はまだ重いものを引きずっていた。
――いや、それを増幅させたのは安藤であるのだが。

「す、み、ま、せ、ん！」

冬二は本当に自分が悪いのかもわからないまま謝り、竹刀を握りなおすと練習相手を見据える。

（最低だっ。ほんっと最低だ！）

昨日プリンをゲットできなかった冬二は、今日こそはと燃えていた。それなのに、教室から出る前に安藤に捕まり、争奪戦に参加することすらできなかったのだ。そして安藤の説教を聞き流しながら食べる弁当が、おいしいはずはなかった。

（神聖な食事の時間を邪魔するなど、教師の風上にもおけんわい！）
食い意地がはっている分、冬二の怒りは人一倍。

「もおおおおっ」

鋭い剣先が相手の面を見事に捉えた。

――しかし。

「なんなのよ、『もう』って。そこは『面』でしょうが！」

逆に横から面をつかれた。顧問の美袋だった。

「一体どうしたの？ あなたもそろそろ引退でしょ。後輩にそんな姿を見せたまま、引退していいと思ってるの？」

女だてらに腕っぷしの強い美袋は、冬二と同じくらい人気のある女教師だった。よって、剣道部がいつも練習している第二体育館は、放課後になると生徒でギャラリが埋まってしまふ。しかしここ数日間は、人はいっても黄色い歓声があがるということはまずなかった。それは冬二の動きが冴えないからであるし、機嫌が悪いせいでファッサービスをしないためでもあった。

「……………」

冬二がなにも答えられないでいると、美袋は「ふう」と大きく息を吐く。

「あなた、ちょっと向こうで頭を冷やしてなさい。わたくしに勝てるまで、引退させないわよ？」

「……わかりました」

冬二は練習相手に向かって一礼し、それからくると背を向けて壁際へと歩いた。

（美袋は強い）

冬二がちよつと力を出したところで、勝てる相手ではない。それこそ全国大会決勝クラスの意気込みと覚悟がなければ無理だろう。つまり美袋は、「最後ならそれくらい集中しろ」と言ったのだ。そして現時点でそれが無理だと自覚している冬二は、その場を退いた。
（どうすれば――）

一体どうすれば、この悩みから抜け出せるのかが、わからなかった。

出入り口に近い壁に背中をくっつけ、一気に身体中の力を抜いた。すすると、尻とかかとかくっつく。

（俺だって、集中したいんだよ）

そのまま後頭部も壁にくっつけて、上を向いた。冬二の視界に、ひょいと割りこんできた顔があった。

「冬二先輩！」

部の後輩だ。しかし、道着ではなく制服を着ている。

「私、今日病院だから帰ろうとしたんですけど、そうしたら校門のところに先輩の妹さんがいて……」

「へ？」

続けられたのがあまりにも予想外な言葉だったので、冬二は変な声を出してしまった。

「妹って……」

（まあアキなわけないから、ハルか）

だが一体なんの用だ？

ただでさえ頭の痛い問題を抱えているのに、これ以上ごたごたを増やされるのはごめんだった。

「……ちよつと行ってくる」

「よっ」と、上半身を後ろにそらした反動を利用して立ちあがると、冬二はそのまま外に出ようとした。

「先輩、靴靴！」

「お、忘れるところだった」

仮履きのサンダルを借りて、校門に急ぐ。あまり長時間そこにいられては、他の生徒に絡まれる可能性があるからだ。しかもそれは、不良に絡まれるのよりももっとタチが悪い。

（あいつら、取り入るために絡むからなあ）

だから本当は、家族の誰も学校には来てほしくなかった。冬二が今までそれを口に出さなかったのは、一夏はどうせ忙しくて来られないだろうし、三春にはそんな行動力などないと思っていたからだ。しかし、三春はやってきた。

どんな心境の変化があったのかは知らないが、次はないようにしなければならぬ。

（お、いた）

校門に寄りかかって待っている三春の後ろ姿を見つけた冬二は、わざと怒っているふうな口調で声をかける。

「なにしに來たんだっ、三春！」

一瞬びくりと震えた三春だったが、冬二の姿を視界に入れると安心するように息をはいた。

「あのね、相談があつて……」

「相談？ 家のことか？」

咄嗟にそう訊き返したのは、家ではできない相談なのかと思ったからだ。

だが三春は首を振って、

「ううん、学校の――」

冬二がまだ道着でいることを気にしているのだろう、手短に話しはじめた。



結果から言えば、冬二は三春を追い返した。

（だってあれは、三春にしか解けない問題だ）

三春の親友が、合唱部で起こっている盗難事件に巻きこまれていろいろなのだが、だからといって冬二が母校に乗りこんでいったってどうにもならないのだ。最近大会の成績をおとしているというのも、きつと無関係ではないはず。

——そう、冬二は話を聞いただけで、薄々『答え』に気づいていた。しかし、変わりをはじめている三春を見守るために、あえて背中を押すだけにとどめたのだった。

（ハルの『耳』があれば、大丈夫）

人の台詞を無意識にすべて記憶してしまうナツの『耳』とは違う方向で、ハルの耳も発達していた。それは限られた力であるだけに、これまでその力を活かせる事件に遭遇しないままであつたから、どうやら三春は家族に対し疎外感を覚えていたらしかった。

（それが少しでも、やわらげばいい——）

そんなことを考えながら、冬二は帰途についていた。あのあと一度体育館に戻ったのだが、結局最後まで壁際に張りついたままだった。集中していない冬二を見抜いている美袋は、冬二が立ちあがることを許さなかったのだ。そして最後には、先に帰っていいと。

（——にしても、落ち着かないな）

道路そのものは当然いつもと同じなのに、時間帯が違うだけで雰囲気もがらりと変わっていた。普段は一緒にならないような、ギャル系の女子たちがいっぱいいるからだろうか。

「あれー？ その後ろ姿、冬二っ？」

「へ？」

そんなギャルたちの視線をひとり占めしながら歩いていると、後ろから声をかけられた。相手が誰なのかは、振り向かなくともわかった。毎日身近で聴いている声。

「美希！？ どうしたんだ、こんな時間に」

「それはこっちの台詞よ」

笑いながら、美希がゆっくりと近づいてくる。

（ん？）

その瞬間おかしいと思ったのは、いつもの美希ならば元気よく走って近づいてくるからだ。

「足、怪我したのか？」

引きずっている様子はないが一応訊いてみると、美希は「よくわかったわね」という顔をした。

「軽い捻挫だけだね。まさか冬二も？」

「俺は違う」

苦笑を返す。

美希が隣までやってくるのを待ってから、先ほどまでよりのんびりしたペースで歩き出す。

「『集中できない子には練習させません！』」

「ぷ。それって美袋センセが言ったの？」

「そう。笑えるだろ」

「集中できなかったのって、妹さんのせいではないのよね？」

「その前から俺、イライラしてただろ？ ——って、なんだ、やっぱりハルのことウワサになってたか？」

冬二は常々、女子は男子の三倍は情報伝達速度が速いんじゃないかと思っていたが、どうやらそれはあながち間違いではないようだ。「だって、『冬二せんぱあい（はあと）』の妹さんだもの！」

「その言いかたむかつく」

「あはは」

むかつくとは口にしたもの、それが美希なりの励ましかたであることはわかっていたから、冬二の心は少しの元気を取り戻す。

「で？ 妹さんはなんの用事だったの？」

「ああ、それが――」

冬二が三春に聞いたことをそのまま話すと、美希はなぜか面をくらった顔をつくった。

「美希？」

足が痛むのだろうか、ちらりと下を見る。見ているうちに。

「あはっ、あはははっ」

また笑い声がしたので顔を戻すと、美希はいつもの笑顔に戻っていた。

「やだ、そんなあんた初めて見たーっ」

「なに喜んでるんだよ」

「だって『普通らしい』じゃない？」

「え……？」

両親が有名人だから。学校では人気がすぎるから。その環境ではすでに、『普通』になりきれなかった冬二。――いや、本人は普通であると思いこんでいた。普通に生活できているのだと。

しかし――

「ねえ冬二。あんた本当は、それを自分に言い聞かせたかったんじゃないの？」

でも「それは違う」と、美希は言う。

「『それ』って？」

「だって今あんたが抱えてる問題だって、あんたにしか解けないことじゃない」

「あ……」

『おまえが自分でなんとかしろ！』

自分が三春に投げた言葉を思い出した。

（ハルなら解けると思ったから）

三春にしか解けないと思ったから。

あるとき冬二はそう告げたのだ。

そして今、自分が抱えている問題は――

「……そのとおり、かもしれない。結局は俺が、なんとかするしかないんだ」

どんなに悩んでも。

どんなに嘆いても。

誰も代わってはくれない。

変わってもくれない。

（俺が変えなきゃ、しょうがないんだ）

悩むことに一生懸命で、そこまで考えることができていなかった自分を、冬二は改めて自覚した。

「――それに、あんたさ」

「え？」

美希の言葉は、まだ続いているらしい。

「自覚してないかもしれないけど、遠慮してるでしょ。両親の名前を傷つけたくないとか、家族に迷惑かけたくないとか、日常的に思ってるんじゃないの？」

「それはあたりまえだろ!？」

万が一冬二がその名を汚しても、本人たちはもういないのだ、挽回できるチャンスはほとんどない。家族のことにしたって、両親がいないから駄目なんだなんて言われたくないし、自分のせいで家族が悪く言われるのもさけたかった。冬二にとって、それは自然な感情であるように思えていた。

「あたりまえだけど、あんたのはちょっと異常なの! 本来の俺たちはもっとギャランドウなはずよ。それを抑えてるから、変に悩んだりしてるんじゃないの?」

「俺は胸毛なんか生えてないぞっ」

「馬鹿ね、ギャランドウって、ギャル・アンド・ドウの略なのよ。つまり『行動的な女』ってこと!」

（し、知らなかった……）

一体誰の陰謀なのか、冬二は今の今まで『ギャランドウ』胸毛』だと思いこまされていた。

（――でも、確かにな）

安藤や一夏の言葉ではこう簡単には入ってこないが、美希の言葉は冬二にとって、最も通りがよく信頼できるものだった。

（俺は無意識に、自分を抑えていたのかも）
逃げることはかり考えていたから。

冬二は自分から安藤に向かっていって、この気持ちを伝えようとしたことなどなかった。それなのに、伝わらないと嘆いていた。

「……ありがとう、美希。俺やってみるよ！」

やっと解決の糸口を見つけた冬二に、美希は唇の端をあげる。

「じゃあ明日、自腹でプリン一個ね」

「まかせとけっ」

こここのところ連敗中なのだ、復活するからには華麗に手に入れてみせよう。

冬二は明日のために意気こんだ。意気こんで、家に帰ったあと冷蔵庫を開いた。気合を入れるために、昨日入れておいたプリンを食べようと思ったのだ。今日の昼のファンからもらった分はすべて学校で食べてしまったから、実は楽しみにしていた。

（誰か食べてないだろうな……？）

半分くらい不安ではあったのだが、冷蔵庫のなかを覗きこむと、プリンは確かにそこにあった。他では売っていないプリンなので、間違いない。

――はずなのに。

「あ、あれ……？」

自分ひとりしかないのに声を出してしまうほど、おかしい事態が起きていた。

（俺が書いた名前が消えてる！？）

水性ペンで書いたなら水でも消えるだろうが、冬二はぼっち油性ペンで書いていた。しかもフタにだ。無理に消そうとして擦った

ら、簡単に穴が開いてしまうだろう。

「……………ま、いっか」

数秒間悩んだ冬二は、しかし気にしないことにした。これが例のプリンであることには間違いがないのだ。名前が消えたことは不思議ではあるが、今はそんなことを考えるほど暇ではない。

（明日は、戦いだ！）

プリン争奪戦だけじゃない。

美袋や安藤とも戦おう！

冬二はそんな決意をこめながら、スプーンにのせたプリンをゆつくりと口に運んだ。ひと口ひと口、味わいながら。

【第1話】次女・冬二の日常－4

竹刀を構えて、冬二は美袋と向かい合っていた。試合はもう始まっている。膠着状態のまま四分が経過し、あと一分。

冬二はいつになく集中していた。

高校から剣道を始めた冬二と、有段者の美袋ではそもそも結構な実力差があるのだ。だがそれを感じさせない動きで、冬二はここまで耐えている。

（そろそろ、美袋も焦ってくるはず）

ふたりの実力差を誰よりもよくわかっている美袋だからこそ、確実に一本を取りにくるだろう。

（狙うなら、そこしかない！）

動きを一瞬も見逃さないよう、冬二はそつと呼吸を整える。

「冬二ーっ、頑張るのよー」

他のファンになんの遠慮もなくあがった声は、美希のもの。美希も本来なら部活の時間ではあるのだが、足の怪我を理由に休んで、応援に来てくれたのだった。

（勝たなきゃ）

昼にやっとの思いで手に入れたプリンは、「試合に勝ったら受け取るわね♪」とつき返されてしまった。あのプリンを、あの情熱を、冬二は無駄にするわけにはいかなかった。

制限時間ぎりぎりになって、美袋の足が動く。ちいさく下がった右足は、まるで体重を後ろに移動したかのように見えるが、それがいつもの美袋の手だった。実は体重が乗っているのは、そうと見えない左足。それに気づかなければ、なぜ自分が打たれたのかわからないまま試合が終わることになる。

（来る！）

その動きを確かに捉えた冬二は、流れるような動きで胴を狙ってきた美袋の竹刀をさばき、その反動を利用して美袋の小手を突いて

やった。それは、いつも美袋に「手首がやわらかいわね」と褒められていた、冬二にしかできない技だった。

「小手あり！　そこまでっ」

審判役の生徒の宣言で、ふたりは静かに竹刀を下ろした。互いに開始線まで戻り、まっすぐに視線をぶつけ合う。

「冬二先輩の、一本勝ちです！」

宣言された瞬間に、ギャラリーから歓声がわきあがった。何人かの後輩が、一体どこに隠していたのか、花束を持って冬二に近づく。「これで引退、なんですよね？」

「あ、ああ……」

「今まで、ありがとうございましたっ！」

ひとりが告げると、あとにみんなが続いた。

「ありがとうございます！！」

多くの生徒が頭をさげるなか、冬二の目に、ふんぞり返ってこちらを見ている安藤の姿が映る。そこで冬二は、

「安藤先生！　約束ですから、話を聞いてもらいますよ？」

わざとていねいな口調で言ってやった。

そう、試合前に安藤と約束をしていたのだ。もし自分が勝ったら、一方的に話を聞いてほしいと。これまで安藤と向かうあうときは、ほとんど安藤が一方的に話していた。冬二がいくら言葉を挟もうとしても、結局安藤に負けてしまうのだった。だがそれでは、気持ちには少しも伝わらないから。冬二は美袋に勝つことで、安藤にも勝つうと思ったのだ。

冬二が安藤を見つめつづけると、みんなの視線も自然に、引きつった顔の安藤に集まる。

「お願いします、先輩の話を聞いてあげてください！」

「先輩にひどいことしないでねっ」

「先輩を怒ったら呪ってやるんだから」

「わかったわかった、ちょっと黙っとけ！」

詰め寄られて、困ったような嬉しそうな顔をしている安藤。それ

を見て豪快に笑う声は、面を外した美袋のものだった。

「わたくしからもお願いしますよ、安藤先生。今日の西ノ宮はいつになく集中していました。そして昨日までの西ノ宮は、いつになくボロボロでした」

「せ、先生？」

「その理由の一端があなたにもあるのなら、ここで逃げるのは得策じゃありませんわ」

大人の魅力あふれる笑顔で、美袋は冬二の味方をしてくれた。すると安藤は、まっ赤になった顔をぶるぶる震わせながら、

「よ、よしっ、進路指導室で待ってるからな！　だ、だがおまえのためだけじゃないんだからなっ？」

人差し指を突き出してそう告げると、わざとらしいほど足音を立てて去っていった。

「なにあれー」

「超かわいい！」

（っておい、どういう趣味してんだおまえらっ）

ちよっとげんなりしたところを、肩を叩かれる。美希だった。

「おめでと！　やったわね、冬二」

「最大の山場はこれからだけだな」

「じゃあプリンはそのあとね！　楽しみにしてるから♪」

天使みたいな笑顔で、悪魔のようなことを言う。だがそれでこそ、美希だ。美希は自分を偽っていないからこそ、美希らしいと言える部分がある。

（俺も――やらなきゃ）

どうせ生きるなら、俺らしく生きなきゃ！

冬二は堂々と安藤に宣言してやろうと思った。

「俺は大学には行かない。だけど、両親を越える探偵になってみせるよ！」

きっとみんながそれを望んでいる。

大学に行かなくなったら、自分らしく頑張れるところを、見せてやるんだ！

【第2話】長女・一夏の日常―1

一夏^{いちか}は急いでいた。

今はちょうど、スーパーのレジ店員のパートと、夜のファミリーレストランでのアルバイトのあいだの時間帯。このわずかな時間で一度家に帰って、妹たちの夕食の準備をしておかなければならないのだ。

必死だった。まるでひとり競歩大会をしているかのような、足の動き。もちろん形相にもその必死が表れており、ティッシュ配りのお姉さんですら、一夏をさけたほどだった。

――それなのに。

「あ、あのっ、一夏さんですよね!？」

ひっくり返った声に呼びとめられて、さすがの一夏も足をとめる。視線を移すと、立っていたのは制服姿の女子高生だった。しかも、見たことのある制服を着ている。

(……あ、そうだ。冬二ちゃんと同じ制服だわ)

毎朝見ているので、さすがにわかった。ただ、妹の冬二には目玉が飛び出るほど似合っていない制服だが、目の前のおさげ髪の少女にはよく似合っていた。

その少女は小走りで一夏に近づいてくると、

「と、冬二先輩のお姉さんですよねっ？」

尋ねてきた声は、呼びかけた声と同じようにひっくり返ったものだった。

(二回ひっくり返ったから、次はもとに戻るかしら?)

なんて少々ずれたことを考えながら、一夏は「そうだけど」と口にする。

すると次の瞬間、

「じゃあこれっ、先輩に渡してください! お願いしますね!？」
やはりひっくり返ったまま告げた少女は、一夏になにか袋を握ら

せると、そのまま走っていつてしまった。

「あ、ちよっとっ……？」

（新手のピンポンダッシュかしら？）

家へと急いでいたため、追いかけるわけにもいなくて、一夏は半ば呆然とした頭で手もとに目を落とす。

袋のなかには、プリンがひとつ入っていた。

（うーん、ちびたちがケンカするかもなあ）

しかし、プリンを買い足す時間など、今の一夏には残されていないのだ。

「あ！ そうだっ、早く帰らないと——」

思い出して走り出そうとしたとたん、豪快にすっ転ぶ。

「でっ」

ぶつけたひざが、痛い。

だがいいおとなだ、泣くことだけは我慢する。

「~~~~~むんっ」

歯を食いしばって立ちあがると、再び走りはじめた。

（生傷は女の勲章ッ！）

一夏はそう思うことにしていた。——本当は、たんにドジでおっちょこちょいなので生傷が絶えないだけなのだが。

その証拠に、家に自転車があるにも関わらず、一夏は使うことを禁止されていた。いつか人に大怪我をさせるのではないかと、心配した冬二が禁止令を出したのだ。かといって、電車やバスに乗るような距離でもないので、一夏はいつもものすごいスピードで歩いているのだった。

少々息を切らせて家に着くと、予定どおりいちばん下の秋四とその次の三春の靴が並んでいた。しつこく注意したからか、やっと靴を脱いだあとそろえてくれるようになった。

一夏はひとりにんまりと笑ったあと、とりあえず手もとのプリンを冷蔵庫に隠すため台所へと向かい——そこで、奇妙なものを目撃する。

「――秋四ちゃん、なにやってるの？」

「ふえっ!？ あ、ナツちゃん！」

明らかに食器棚から落ちたらしい、いくつかのスプーンの横で、秋四が床を這いずりまわるような動きをしていたのだ。

「あっ、あのね？ にゃあをさがしてるの……」

「にゃあならいつもの看板の上にいたわよ？」

「そうなの？ じゃあアキ、にゃあに……」

と逃げようとした秋四の襟首を、それこそ猫のように一夏は掴んだ。

「まーちーなーさーいっ。このスプーンはどうしたの？ 今日のおやつはスプーンなんて使わないお菓子だったでしょ？」

一夏は毎朝、秋四のためにおやつを準備してから仕事に出かけるのだ。今日用意したおやつも、あたりまえだが自分でちゃんとわかっていた。

秋四は怒られるのが怖いのか、俯いたまま呟く。

「ごめんなさい……スプーンであそぼうと思ったの……」

「でも秋四ちゃん、台所はひとりで入っちゃダメって、いつも言ってるわよね？ 三春ちゃんはどうしたの？」

すると今度は顔をあげ、一夏に訴えかけるような口調で話し出す秋四。

「それがねっ、ハルちゃんごきげんナナメみたいなの。上からおりてこないんだよ？」

「あら……」

三春がそういう態度をとるなんて、本当に珍しいことだった。

(なにかあったのかしら?)

相談に乗ってあげたい気持ちはあったが、なにせ一夏はこのあとも仕事がある。

「――でも、だからって台所に入っていいことにはならないのよ？」

「うー、ごめんなさい……」

とりあえずその場は秋四に言い聞かせるだけにして、台所から秋

四を追い出すと、一夏はさっと持っていたプリンを冷蔵庫のなかに隠した。

（ちよっと時間ロスしちゃったなあ）

しょうがない、いつもより手抜きでいっか。

妥協しながらも、一夏は手早く夕飯をつくってゆく。

——しかし、できあがるまでに三回も指を切ってしまったのだった。



自分がなんとかしなきゃ。

そういう思いは、常にあった。

両親が亡くなったとき、すでに二十歳だった一夏は、その細い肩に自分を含めた四人分の生活を預かることとなったのだ。

（本当はね、ちゃんと就職したかったの）

忙しくお皿を洗いながら、切った指をかばいながら、一夏は昔のことを思い出していた。

（だけど私がいかに、『こう』だから）

面接ではなんとか切り抜けて、仮採用にしてもらっても、すぐに失敗して取り消されてしまう。そんなことを何度かくり返して、結局一夏は正社員になることができなかった。

今やっているこのアルバイトも、最初はウェイトレスとして入ったのに、一夏があまりにもものを落とすから、ついにはお皿洗いにまわされてしまったのだった。——しかもまだ、皿割りの記録は更新中だ。ついでに今日は、先ほど切ったばかりの指が痛んで洗にくい。

店の人に迷惑をかけていることは、誰よりもわかっていた。だが一夏は、そう簡単にやめるわけにはいかなかった。

（生活がかかっているから）

それ以上に。

（冬二ちゃんに、大学へ行ってほしいの）

冬二は一夏に比べたらはるかにしっかりしていたし、頭もよかった。いちばん、『伝説の探偵夫婦の娘』にふさわしい存在だった。

——その外見と口調以外は。

だから一夏は、冬二に大学へ行ってほしいと思っていた。そして探偵として、うちに置いてあるあの看板を継いでほしいと。

（勝手な願いだってことは、わかってるんだけどね）

以前冬二にそれを話したら、ケンカになってしまった。冬二は冬二で一夏を助けたいと思っているようで、「大学には絶対行かない」と言い切ったのだ。しかし、冬二の担任も冬二を大学に行かせたがっているらしく、最近の冬二はどこかイライラしている感じがした。「——一夏っ、次の注文は!？」

切羽詰ったような声をかけられて、一夏は「はっ」と我に返る。

声の主は、調理担当の広弥ひろやだ。

「えっと……」

一夏は記憶を掘り起こし、先ほどまで耳に入ってきていた注文の台詞を呼び覚ます。

「……『ともこのトキメキ★ハンバーグ』がふたつに、『おませなサラダ』が四つです!」

「了解っ」

かわいいエプロンをつけた広弥は、敬礼みたいにおたまを頭に近づけた。

するとその後ろから、

「こら広弥! なにやってるんだっ」

メインで調理をしている男性の怒号が飛んできて、広弥はひとつ苦笑を浮かべたあと戻っていった。

——そう、一夏がこのアルバイトをクビにならずにすんでいるのは、ひとえにこの『力』のおかげだった。一度耳に入った台詞は、自分の意識が及んでいなくともすべて憶えてしまうのだ。

実は妹の三春も同じような力を持っているが、三春のほうは音の

高さやハーモニーを聞き分ける能力であり、その力を生かせる場所
がかなり限定されている。そのため、三春は「自分はなにもできな
い」と思いこんでいるらしく、他の姉妹にコンプレックスをいだい
ているようだった。

（まったく、賢い妹を持つと大変だわ）

なにも考えずに見ていられるのは秋四だけ……と言いたところ
だが、秋四もやんちゃでなかなか目が離せない。

本当に困った妹たちなのだ。

だが一夏は、そんな妹たちが大好きだった。

——恋人を、二の次にしてしまうくらいに。

【第2話】長女・一夏の日常―2

一夏が一心不乱に仕事をするようになって、いちばん感じたのは時間の経つ速さだった。家の掃除や洗濯は、妹たちが手伝ってくれるからまだいいが、まさかパートやアルバイトまでを手伝ってもらわねにはいかない。

笑顔を、つくりつづけなければいけない。

「いらっしやいませ」

やっと昨日のお皿洗いが終わったと思ったら、もう今日のレジ店員だ。お客さんの気配を感じた一夏はすぐに、買いものカゴを受け取って対応を始めた。

――と。

「どうしたの？ 一夏。なんか元気ないね」

「広弥……」

そこに立っていたのは、エプロンをしていない広弥だった。むしろスーツが似合っていない。

一夏は手を動かしながらも、会話を続ける。

「広弥こそ、その格好なに？」

「今日は派遣の仕事があったんだ。オレだって、夜のバイトだけじゃ食っていけないからさ」

「そう……なんだ」

「それにもっとお金貯めないと、誰かさんが結婚してくれそうにないし」

――ピピピッ

勢い余って、同じバーコードを三回読んでしまった。

「大丈夫か？ 一夏」

「あ、あなたが変なこと言うからでしょ！」

「変かなあ」

本気で不思議そうな顔をしている広弥を無視して、

(平常心、平常心……っ)

と心のなかで唱えながらバーコードを読み直す一夏。

そんな一夏を見て、ふっと苦笑を浮かべた広弥は、もう一度口を開いた。

「――で、一夏はどうしたわけ？」

「え？」

「だから、元気ないだろ」

一夏は、つい手をとめてしまう。

「『どうした』ってほどでもないけど……妹が、今朝からちよつと風邪がみみたいで」

「そっか」

一夏自身になにかがあったわけではないことがわかって安心したのか、広弥はひとつ小さな息を吐いた。

「ま、うつされないように気をつけろよ」

「――三五四五円です」

一夏が真顔で値段を告げると、広弥はおずおずと五千円札を出してくる。

それを受け取り、レジのキーを打って、おつりを渡しながら一夏は――

「私ね」

「え？」

今度は広弥が聞き返す番だった。

「私より先に妹の心配をしてくれるような人じゃないと、結婚したくないの」

にっこりと笑った一夏に、広弥の動きがとまり、そして次の客で――一夏の動きもとまった。

「動くなっ！ 全員手をあげろっ!!」

一体いつの時代の、刑事ドラマだろうか。



サングラスをした男に、銃を突きつけられているのは一夏。だが一夏は、そのスーパ―内にいた誰よりも、実は冷静だった。

（だって、慣れているもの）

ドジでおっちょこちよい、怪我が服を着て歩いているような一夏にとって、『日常』そのものがスリルの連続だ。これくらいのことでは、驚きはしない。それに、突きつけられているその銃が本物であるかさえ、まだ誰にもわからないのだから。

「おい女っ、この袋に金を入れろ！」

それでも一応両手をあげている一夏の前に、男は麻袋のようなものを置く。

「……………」

一夏は無言で、男の顔を見つめた。

サングラスの向こう側の男の目が、ぎょろりと動く。

「どうした？　なぜ入れない！？」

動かない一夏に苛立ったのか、男がチェッカー台をどんと叩いた。

「一夏！　言うとおりにしろっ」

いちばんそばにいるものの、男が一夏に銃を向けているため、それ以上近づけない広弥の声も聞こえた。

だが、一夏は、動かない。

「私、言うとおりにしてますよ？」

「なに？」

「だってさっき、あなたが言ったんでしょ？　『全員手をあげろ』

って。それには私も含まれてますよね？」

袋にお金を入れるには、手をおろすしかない。だから一夏は黙っていたのだ。

「屁理屈を言うな！　おまえはおろしてもいいに決まってるだろうっ」

男は次にチェッカー台を蹴った。がしゅんと、レジのなかの小銭が揺れた。

だが、一夏は、動かない。

「じゃあ、ちゃんと言ってくれないとダメです。私、かなりおつちよこちよいだから、できる限り言われたことしかやらないようにしてるんですよ」

それは半分くらい本当だった。一夏が自分で考えて行動すると、結局やっぱり半分くらい人に迷惑をかけてしまうからだ。

「正確に言ってくださいね。私はなにをいくつ入れたらいいですか？」

「うざったい女だなっ、もういい、どけ！」

男はそう叫ぶと、銃を右手から左手に持ち替え、さらにその左手をチェッカー台につき、身を乗り出した状態で右手をレジに伸ばしてきた。

——当然、銃は一夏のほうを向いていない。

（今だわ！）

一夏は鋭い動きでそばに置いてあったテープカッターを掴むと、男の左手に落としてやった。

「いっつてえええええっ」

ひどく鈍い音がして、男の手から銃が落ちる。

咄嗟に近づいてきた広弥は銃を蹴りあげ遠くへ飛ばすと、男を取り押さえた。

男が銃を手放したとわかれると、その場にいた他のお客さんや店長も協力して、男を縛りあげることになったのだった。

しばらくしてやってきた警察に犯人を引き渡すと、一夏は「さすが西ノ宮探偵夫妻の娘だ」と褒められた。しかし逆に、広弥には怒られてしまった。

怖い思いをしただろうからと、店長が気を利かせて早退させてくれたから、ふたりで優雅にお茶なんかしているのに、話題はあまりにもつまらない。

「あのなあ、一夏！ 頼むから、ああいうときは素直に犯人の言うこと聞いてくれよっ」

声を荒げる広弥に、小さな喫茶店の狭い店内だ、人の視線が集ま

る。

「声が大きいわよ、広弥」

言いながら一夏は、紅茶に砂糖を入れてかき混ぜた。

「それに、私はちゃんと言うこと聞いてたもん。広弥だって聞いてたでしょ？」

「『もん』じゃない！ 下手すりゃ撃たれてたかもしれないんだぞ！？」

その言葉に、混ぜる手をとめる一夏。

「——だって、ナイフのほうが銃より怖いって、お父さんが言ってたから」

「え？」

姉妹のなかで最も長い時間を、両親と過ごしている一夏。そして一夏は、そんなふたりの言葉を余すことなく憶えていられるという力を持っていたから。いずれはひとつひとつ、妹たちに伝えようと思っていたのだ。それがまさかこんな形で、自分の役に立つとは思わなかったのだが——

「銃はね、『本体』と『弾』がないと成立しないでしょ。しかも、おもちゃの銃で人は殺せない。でも、ナイフは違うのよ。ナイフはそれだけでいい。たとえ刃がなくても、おもちゃだって、人を殺せる」

「おい一夏……おまえまさか、『銃のほうが安全だから』っていう理由で、あんなに落ち着いてたのか……？」

「違う、安全とは言っていないよ」

「でも、そういうことなんだろう？」

「……………」

「頼むから、今度こういうことがあったら逃げてくれよ。有名な探偵の娘ってことで、今みたいな偶然の事件じゃなくて、本格的に狙われることだってあるかもしれない。さっきの拳銃だって、オレが蹴ったあとどっか行っちゃったって話だ。それなのに——おまえがそんなんじゃない、オレは安心して生活できないよ……」

先ほどまでの勢いが嘘のように、広弥は全身の力を抜いてテーブルに突っ伏した。

だが当の一夏はというと、

（そんなこと言われても……）

正直全力で戸惑っていたのだった。

一夏は別に、自分の身を大切にしていないからそういう行動に出たわけではない。今まで自分が得てきた台詞でなんとかできると思った部分もあって、落ち着いていたし犯人を予想どおりの行動へと導くことができたのだ。それは一夏なりに、自分が安全であることが前提の作戦であった。だが考えてみれば、一夏がその行動をおっちょこちょいなしでやり遂げられたのは、ある意味奇跡なのかもしれない。

なにも言えなくて、一夏は散々かき混ぜていた紅茶のカップを手取る。

次に広弥が口を開いたのは、一夏がそれをひと口飲みこんだ瞬間

「ちなみに、さっきおまえが入れてたの『塩』だぞ」

「ぶーつつつ」

予想外の味に、一夏は盛大に吹き出してしまった。

「早く言ってよッ！」

【第2話】長女・一夏の日常―3

「もうちょつといいだろ?」とごねる広弥を置いて、一夏はさつさと家に戻ってきた。

というのも、冬二から「早めに帰る」とメールが来ていたからだ。少しの時間でもちゃんと話ができるなら、しておきたいと思った。

(大学、やっぱり行かせたいし)

しかし冬二がその気にならなければ、意味がない。

秋四もまだ帰ってこず、ひとりうとうとしながらみんなの帰りを待っていると、意外にも先に帰ってきたのは冬二と三春だった。

居間へやってきて、一夏の顔を見るなり冬二は。

「ナツ! 俺ちゃんと、担任と話つけてきたからなっ」

仁王立ちをして、一夏にそんなことを告げた。

「話? 話って?」

「大学には行かねえ。大学なんか行かなくても、探偵の勉強はできる! だってナツが、教えてくれるだろう?」

「冬二ちゃん……」

ふたりを見守る三春は、目を大きく見開いて、固まっている。

「俺、知ってるんだぞ。ナツって、ほんととちゃんと探偵の知識があるんだろ?」

「違う、私はお父さんたちが言った言葉をそのまま憶えてるだけで、意味がわからないものだってたくさんあるわ」

「じゃあそれを俺に教えてくれ。俺がそれを理解するから」

「……………」

冬二なら、確かに理解できるだろう。一夏だって教えるつもりだった。――だが、想定していたのはこんなに早いタイミングではなかった。

言葉を返せない一夏。

すると三春が一步踏み出してきて、

「ナツ姉、よかったら、わたしにも教えて？　わたしにも、できることがあるかもしれない」

「えっ？」

それは、これまでの三春からは考えられない言葉だった。「どうせなにもできない」と、最初から諦めていた三春からは。

（いつの間に、変わってたの……？）

戸惑う一夏を、さらに戸惑わせる声が飛ぶ。

「アキもねっ、きっとヤクに立つよ！」

そう言いながら、秋四が一夏に抱きついてきた。

「秋四ちゃんっ、いつ帰ってきたの？」

「ついさっきだよ。あのね、アキね、今日学校で、ジケンカイケツしちゃったんだよ！」

「――っ」

知らないあいだに、みんなそれぞれしつかりと成長していた。

（とまっていたのは、もしかして私だけだった……？）

みんなのために働くことで精一杯で、振り返ろうとはしなかった。「いちばん上だから」という気持ち働いて、素直に目を向けられなかった部分もあるだろう。

「……なあ、ナツ。いずれは俺、探偵事務所を継ぎたいって、ちゃんと思ってるんだぜ？　でも『ひとりで』じゃない。そのときは、『みんなで』やるんだっ」

「冬二……みんな……」

これから仕事があるというのに、一夏はあふれてくるものをとめることができなかった。

（私ね、いろんなことに『この言い訳』を使ってたの）

「いちばん上だから」以上に、「みんながいるから」というのは便利な言葉だった。

だが今、それがいかに失礼なことであつたかと思ひ知った。

（そこに私の本当の意思はあったの？　犠牲になったフリをしていただけじゃない？）

むしろ、ドジでおっちょこちょいな自分の犠牲になっていたのは、みんなのほう――

「ナツ……ナツこそ、本当に自分がやりたいこと、やっていいんだぞ？」

（そうやって私を、バイトに行かせないつもり？）

一夏は泣きながら笑った。
久々に、心から笑えた。



バイトの時間まで目の腫れがとれるはずもなく、ロッカールームで顔を合わせた途端広弥につっこまれた。

「おい一夏っ、なんだその目!？」

昼間のことがあって、広弥は必要以上に一夏を心配している。

「たいしたことじゃないわ。言ってたでしょ、冬二と話をするからって」

「あ、ああ――」

それが家族内のデリケートな話だと思ったのか、広弥はそれ以上聞いてこなかった。

「あのね」

妹たちに許された一夏は、やっと本心を口にする。

「私、広弥のそういうところは結構好きよ」

「えっ!？」

「でもごめんね、結婚する気は全然ないの」

「あっ、そう……」

一瞬広弥の周りに見えた花が、すぐに枯れた。

「勘違いしないでね。それは相手が広弥だからでも、妹たちがいるからでもないから」

「じゃあどうして？」

俯いた広弥が、上目遣いに訊いてくる。年下に弱い女性なら、こ

れで落ちてしまうこともあるだろう。だが、『自分』を取り戻した一夏に、それは効かなかった。

「単に、私の心の問題よ」

（広弥のことは、確かに好きだ）

お互いにはつきりと告白をして、つきあいはじめたわけではない。そもそも、つきあっていることになっているのかもあやしい部分があったが、両想いであることは間違いなかった。一夏とて、ときには甘えることもある。

（でも――）

「一度、ひとりでちゃんと立ってみたいの。広弥からも妹たちからも離れて。物理的な意味じゃないわよ？ 精神的な意味で」

「一夏……」

「おいっ、ふたりともなにをしゃべくってんだ！ さっさとこっちへ来いっ！」

厨房から怒鳴られて、ふたりは慌てて返事をした。話すためにとまっていた手を動かし、手早くエプロンをつけて専用の帽子をかぶる。

――一夏は、すっきりしていた。

やっと初めて、自分の本当の気持ちを広弥に伝えることができたから。心を、ちゃんと整理することができたから。

そのおかげなのか、その日は珍しくミスをすることなく終わった。もしかしたら、一夏がドジでおっちょこちょいな理由は、その不安定な心にあったのかもしれない。

【第2話】長女・一夏の日常－4

そのまま今日が終わっていたら、一夏は「なんて素晴らしい日だったんだろう」と、思えたのかもしれない。だが運命は、そう簡単に一夏を自由にはしてくれなかった。

ロッカールームで着替えを終えて、いざ帰ろうとしていた一夏は、厨房のほうで騒がしいことに気づいて覗いてみた。

すると――

「来るなっ、一夏!!」

まだ後片づけをしているはずの広弥が、なぜかそんな台詞を叫んだのだ。

（え……?）

よく見ると、こちらから見て厨房の奥――客用のテーブルがあるほうに、人が立っていた。もう閉店時間は過ぎていて、普通なら誰かが入ってくるなどありえないのに。

「あっ……!!」

しかもその男は、銃を手に使っていた。

（またあ!?!）

一日に二度も銃を見るなんて、そうそうあることではない。

「お? 女がいるのか。おいおまえっ、こっちに来い!」

目出し帽をかぶった見るからに怪しい男は、目ざとく一夏を見つけて呼んだ。他の女性たちはすでに帰ったあとで、確かにその空間には一夏しか女がいなかった。

「来るなって!」

広弥は相変わらず必死にとめるが、閉店チェックをしていたらしい店長や他のバイトたちは、「行け行け」と手を動かしていた。

「早く来い! 来ないとその男を撃つぞ?」

銃が広弥に向けられる。

「行くからやめてっ」

叫んだ一夏は、そのままロッカールームを出ると、厨房を通って男のもとへと向かった。――途中、小さな段差に足をとられて転ぶ。「きゃあっ」

今日はせっかくミスなしで終えられたというのに、こうしてまたドジをしてしまった。

「……………」

自己嫌悪で、なかなか立ちあがれない一夏。

「い、一夏……………」

広弥の心配そうな声が聞こえたが、ぐいと一夏の手を引いたのは広弥ではなく男のほうだった。

「大人のくせに段差につまずくなんて、なっさけねえなあゝ」

男は一夏の腰に手をまわすと、自分の身体に近づけ、一夏の顔に銃を突きつける。

（く……………）

「――気が変わった。こいつを殺されなくなったら、一億と、俺が逃げるための手段を確保しろ。俺が逃げ切れると確信できる手段でなければ、こいつを殺す」

「そんなんっ、一億なんて大金あるわけ……………」

「だから用意しろって言ってんだろッ！」

男のしゃがれ声が、耳にうるさかった。

「それまでは、この女で楽しませてもらうぜ」

腰にある手が、いやらしい手つきで一夏の身体をなではじめる。

「――い」

そのとき一夏の名前を呼ぼうとした広弥は、最初の一文字でやめた。

なぜなら一夏自身が、それを手で制したからだ。

「……………なんのつもりだ？」

今度は低く問う男に、一夏は言ってやった。

「大人のくせに『本物』と『おもちゃ』の区別もつかないなんて、なっさけねえなあゝ」

わざと男の口真似をして。

「なにい？」

その言いかたに腹が立ったのだろう、男は一夏の身体を突き放すと、そのかわり正面から銃を構えた。

だが一夏は、怯まない。まるで昼間の騒ぎを見ているかのようにだった。

——それもそのはずだ。

「私、確かにドジで間抜けでおっちょこちよいだけど、これでも西ノ宮の娘ですから」

男はおそらく、眉を動かした。帽子のせいで見えないが、目の大きさが変わったからわかる。

それを見て一夏は、ゆっくりと先を続けた。

「その銃が本物かどうかくらい、近くで見ればわかるんです。……それ、昼間に拾ったものでしょ？」

「なっ!？」

驚きの声をあげる男と同じくらい驚いた様子で、広弥も「まさか……っ」と目を丸くする。

(そう、あの銃はそもそも『偽物』だったの)

あれを間近で見た一夏は、すぐにそうと気づいた。一夏でも気づけるほど、粗末な出来の銃だった。それでも一夏がそれを黙っていたのは、銃が現場から消えてしまったからだ。現物がない以上、一夏のような一般人が「あれはおもちゃの銃だった」と訴えたところで、信じてもらえるわけがない。だから一夏は言わなかった。おもちゃである以上、あの銃によって事件が起ころうとは、もうないだろうと踏んでいたから——

「信じる信じないは、あなたの勝手。でも私、同じ日に二度も同じ銃に狙われて、正直言っても不愉快なの。責任を取ってくれませんか？」

「な、なんだと……?」

一夏の言葉を百パーセント信じているわけではないだろうが、男

は明らかに動揺していた。脚が、ほんの少しだけ震えていた。

銃の鼻先で、一夏はにこりと笑う。

「ごめんなさい、ねっ」

自ら左足一步男に近づいて、残りの右足で思い切り蹴りあげてやった。銃を――ではなく、男の急所を。

「がっ……………」

蹴るまでもなく銃を手から離れた男は、それ以上言葉を続けられないまま、前かがみになって崩れた。

一夏は素早く銃を拾いあげると、今度は男に向けて構える。

「顔をあげてくださる？」

告げると男は、おとなしく顔をあげた。本気で泣いてしまったのか、目出し帽の周りが少し濡れている。

（でも、同情の余地なんかないわ）

「――さよなら」

「っ……………!？」

銃を持つ指に力を入れ、一夏はためらいなく男を撃った。

――パン

その音は、限りなく本物に近かった。だが、その銃口から飛び出したのは――

「……………万国旗い？」

心配そうにこちらを見ていた広弥が、実に間抜けな声をあげた。強盗の男は、見事に泡をふいて倒れている。

「だから言ったでしょ？ 偽物だって」

一夏が笑顔をそちらに向けると、みんなとまっていた時間が動き出したように、

「――あっ、警察に電話！」

「一応あの男、縄で縛っておこうっ」

「一夏ちゃん、悪いけど警察が来るまで残ってね」

「はい」

バタバタと行動を始めるみんなを尻目に、広弥はゆっくりと一夏

に近づいた。その顔は、嬉しそうでもあり、哀しそうでもあった。

「広弥？」

なにも言わないことを不思議に思って首を傾げた瞬間、広弥の手が一夏の背中にまわされる。

「……馬鹿だな、なんでオレに言ってくれなかったんだよ」

「なんのこと？」

広弥の胸に顔をうずめたまま口にしたので、少しくぐもった声になってしまった。

「あの銃がおもちゃだったってこと！」

それは実に簡単な理由だった。

「だって広弥、怒ると思ったから」

「へ？」

一夏は広弥に抱かれたまま、上目遣いに広弥の顔を見る。

「知ったら広弥、警察にそれを言うでしょ？ でも警察はね、そんなのきつと信じない。すると、なんで信じないんだって、広弥怒ってたと思うの」

「……今も充分、怒ってるけどな」

広弥は手を動かして、一夏の頭をぽんぽんと軽く叩いた。

「そうか、どっちにしろ広弥は怒るんだ。あはは」

「笑いごとじゃない！ ——それにおまえ、もしかして事件を引き寄せる体質なんじゃないか？」

自分の腕を広弥の背中にまわして、一夏も広弥を抱きしめる。

「それ言わないで。妹たちからも散々言われてるんだから……」

そう、正社員になれなかったのだって、なにも一夏だけが悪いわけではなかった。ちょっとした事件を一夏のせいにされて、会社をクビになったこともあるのだ。そのたびに協力してくれたり、慰めてくれるのは頼もしい妹たち。

（——ああ、急に顔見なくなっちゃった）

そんなこと口にしたら、広弥が焼きもちを焼くかもしれないけれど。

今日はとても、早く帰りたい気分だった。

「もう少しで警察来るからなーっ。それまでには離れておけよ、おまえら」

抱き合ったままのふたりに、店長の冷やかすような声が飛んでくる。

「あっ、す、すみません！」

基本的には純情な広弥は、慌てて一夏を突き放した。

その動きがあんまり素早かったので、一夏はつい吹き出してしまった。

「な、なんだよ……」

「なんでもない」

笑いながら。

（今日のこと、どうやってみんなに話そうかなあ）

そんなことを考えていた。

一夏は、まだしばらく帰れそうになかった。

【第3話】四女・秋四の日常―1

うちのブツダンには、お父さんとお母さんがすんでいます。

二人はとってもはずかしがりやさんなので、なかなかスガタを見せられません。

三人のお姉ちゃんたちは、なんとかしてそのスガタを見ようと、ブツダンの前におかしやジュースをおいて、よくふんばっています。それでもなかなか来てくれないので、わたしはとてもかなしいです。

だけどブツダンの前で手をあわせたら、そのおかし食べてもいいよって言うから、わたしはとてもうれしいです。

食べるかわりに、わたしはブツダンの前でいっしょうけんめいおどります。

そおいうむかし話を、本でよんだことがあるからです。



『ブツダンの前』というタイトルのこの作文を、煮えたぎる想いをこめて秋四あきよがしたためたのは、忘れもしない今日のことだった。それを讀んだ担任の瑞江先生みづえは、少し困ったような顔をしたあと、「『ふんばる』より『がんばる』のほうがいいわね」と言って笑った。

（だからね、あたしもがんばろうと思ったの）

秋四は、すぐ上の姉である三春が帰ってきたら、一緒に仏壇の上にお菓子をのせてもらおうと思って、待っていたのだ。

しかし、いつもより遅い時間に帰ってきた三春は、珍しくかなり機嫌が悪く――秋四が一階におりていくと、入れかわるように二階へ引っこんでしまった。

仕方なく秋四は、三時に食べずにとっておいたお菓子を、ひとり

で仏壇の上にのせようと試みる。

「……あれれ？」

だが、のせられなかった。それは、手が届かないから——ではなくて、プリンがひとつ、すでにのっていたからだ。しかもなぜか、蓋が開いた状態で。

（早く食べないと、くさっちゃうんじゃないかな）

そう思った秋四は、持っていたお菓子を足もとに置くと、仏壇に向かって手のひらをあわせた。

「いただきますっ」

ちゃんとあいさつをしてから、手を伸ばす。そしてなにもなかった場所に、自分のお菓子をのせておいた。

（これでばっちりだね！）

思いがけなく大好きなプリンを手に入れて、秋四はとても上機嫌になる。軽くスキップしながら、さっそく台所のほうへと向かった。プリンを食べようにも、スプーンがなくてはどうしようもないからだ。

しかし、そこにはまたひとつ、高さの壁が待っていた。秋四が目指すスプーンは、背伸びをしてやっとぎりぎり届くほど高い位置にあるのだ。

（台にのったほうがいいかなあ？）

そびえ立つ食器棚の前で、秋四は考える。

（でも、そうしてるあいだにほかのお姉ちゃんが帰ってくるかも）
とりあげられちゃったら、いやだな。

考えると、台を持ってくる時間があったいような気がした。

今秋四は、どうしてもプリンを食べたかった。

「——よおしっ！」

秋四は腕まくりをして気合を入れると、かけ声とともに食器棚にしがみつく！ 精一杯のつま先立ちで、抜けてしまいそうなほど腕を伸ばした。スプーンが刺さっているコップまで、もう少し。

「ん~~~~~~~~……っあ」

（とどいた！）

と思った、瞬間だった。体が傾き、せっかく触れたコップを倒してしまう。

「……っ！！」

酷い音がして、思わず耳をふさいだ。

さいわい秋四に怪我はなく、スプーンが入っていたコップもプラスチックでできているおかげか、壊れなかった。

しかし――

（あれえ？）

スプーンはなんとか手に入れたが、今度は、持っていたはずのプリンがない。耳をふさぐときに、手を放してしまったのだろうか。どこかに転がっていないかと辺りを見まわしてみるが、音に驚いて様子を見にきたらしいにゃあのしっぽくらいしか、見えなかった。

「にゃあ！ プリン知らない？」

「にゃあ〜」

訊ねてみても、にゃあはその名前のおり鳴いただけで、外に出ていってしまう。

残された秋四はもう一度、自分のまわりを見やった。

「???? おかしいなあ〜」

やはりないようだ。

（せっかく、食べようと思ったのに……）

それから長女の一夏が帰ってくるまで、秋四はずっとプリンを捜していた。そのせいで、落ちたスプーンをもとに戻すのを忘れていて、一夏にこつてりと怒られる羽目になる。しかしまさか、勝手に食べようとしたプリンを捜していたなんて言えずに、秋四はおとなしく話を聞いていたのだった。

（あーあ。明日のお昼のデザート、プリンだったらいいな）

その夜布団に入った秋四は、そんなことを考えながら眠りについた。

【第3話】四女・秋四の日常―2

翌朝、秋四は「ごほっ」と自分の咳で起きた。どうやら寝ているあいだに布団を蹴ってしまったようで、雷さまが喜んでやってきそうなくらい大胆にへそを出して寝ていたのだ。また、調子が悪いのは喉だけではなく、身体もなんだかダルい気がして――

（フツカヨイの大人のふて、こんなかんじなのかなあ？）

テレビドラマでよく見るしぐさを思い出しながら、秋四は階段をおりて一階へと向かう。

「あら？ どうしたの秋四ちゃん」

そんな秋四の様子に、すぐ気づいたのはやはり一夏だ。

「フツカヨイであたまがいたいのか。お水か、イグスリっていうのちようだい？」

「へ？」

近づいてくる一夏の顔が、きょとんとしたものに変わる。

すると後ろから、

「珍しくひとりで起きてきたと思えば、なに馬鹿なこと言ってるんだ」

――ごんっ

飛んできた言葉とゲンコツは、秋四のあとに階段をおりてきた冬二のもの。

冬二は一夏と三春のあいだの姉で、秋四をよく叩くので、秋四はあまり好きではなかった。

「うー……ごほっ」

涙目で唸る秋四の横を、冬二は何事もなかったかのように通りすぎる。

「秋四ちゃん、咳が出るの？」

代わりに「よしよし」と頭をなでながら、一夏が秋四に顔を近づけた。

「あら、ちょっと熱っぽいわね……とりあえず体温はかってみようか」

「んー」

冬二と違って、一夏はやさしい。ちゃんと『お母さん』という感じがする。――とはいっても、秋四は自分の本当の母親のことを、ほとんど憶えてはいないのだが。

「ナツ姉、みそ汁のお鍋が噴いてたから、火いとめといたよ」

台所から三春が顔を出す。

「ついでによそっておいて、三春ちゃん。私は体温計取ってくるから。秋四ちゃんも台所に行つて？」

こくんと頷いてから、秋四は三春について台所に入った。

実は、危ないものがたくさんあるからという理由で、秋四は台所にひとりで入ってはいけないと言われていたのだ。昨日一夏が必要以上に怒っていたのには、そういう理由もあった。

朝ごはんがのっている四角いテーブルでは、冬二がすでに食べはじめている。

（学校だと、みんなそろって「いただきます」なのに……）

冬二はいつも、それを破る。

秋四には、それがとても不満だった。

よいしょと椅子によじのぼって、食べる冬二をじっと睨んでみると、

「……アキ、おまえ、学校休みたからって、嘘咳するんじゃないぞ？」

「うそじゃないもんっ――ごほごほっ」

いきなり大声を出したせいで、秋四は余計に咳きこんでしまった。

「そうだよフユ姉。アキをフユ姉と一緒にしないの！」

みそ汁を運んでながら、三春が秋四の味方をする。

「うっせーよ。俺だって別に学校行きたくないわけじゃない。センコーと口ゲンカするのが面倒なだけだ」

と言いながらも、冬二の手はしっかりとみそ汁を受け取っていた。

「ケンカはダメって、ナツちゃん言ってるのにいー」

一夏はなぜかいつも、冬二を特別扱いする。簡単に言うと、『ひいき』というやつだ。

秋四がそれを面白くないと思っていることに気づいている冬二は、「にい」つと意地悪な笑みを浮かべる。

「俺はいいの！　だって、俺のケンカは全部、ナツのための喧嘩だもん」

「それ、どういうこと？」

みんな分のみそ汁をよそいおわった三春が、秋四のとなりに座って問いかけた。

秋四も真似をして続ける。

「どうということー？」

だが、

「――お待たせ。秋四ちゃん、これを脇の下に挟んでね」

ちょうど一夏が戻ってきてしまったから、その答えを聞くことはできなかった。

食卓に漂っている変な空気を感じ取ったのか、一夏は少し眉を寄せて三人の顔を見まわす。

「……なに？　みんな、どうしたの？」

「なんでもないよ。じゃあ俺、もう行くから」

冬二は逃げるように立ちあがると、カラになった茶碗を重ねた。

「冬二ちゃん？」

「なんでもないって！　あと、ちゃんづけはやめろっていつも言ってるだろっ」

そう言い残して、二階に戻っていく。

一夏はその背中を見送って、独り言のように呟いた。

「どうしたのかしら、あの子……」

その隙に、秋四と三春は顔を見あわせて頷きあう。

秋四には難しいことはなにもわからなかったが、なんとなく一夏には言わないほうがいいと、直感的にわかったのだった。

一夏の手から体温計を奪い取り、自らわきの下に挟みこむ秋四。
そこで一夏もハツと我に返り、あとは食べるだけの状態になっている食卓を思い出した。

「じゃあ食べましょっか」

一夏のその言葉を合図に、秋四と三春は「いただきますーす」と声をそろえる。

途中何度か、咳が食べるのを邪魔してきたが、秋四の食い意地に敵うはずもなく――そう、食い意地に関してだけは、秋四と冬二は永遠のライバルだ。昨日のプリンだって、もしあれが冬二のものであったとしたら……想像するのも恐ろしい結末になっていたことだろう。

秋四がそんなことを考えながら箸を動かしていると、カバンを手にした冬二が下へおりてきた。外に出る前にもう一度、台所に顔を出す。

「ナツ、俺、今日から早く帰れるかもしれないから。もしそうになったら、メールで連絡する」

「わかったわ」

一夏に告げたあとなぜか、秋四のほうに視線を移して続けた。

「で？ 熱はあったのか？」

「あ、わすれてた」

秋四はわきに挟んでいた体温計をはずして、一夏に渡す。自分ではまだ、見ることができないのだ。数字を読むことはできても、どれくらいの数字なら高いのか低いのかかわからない。

「うーん、〇・五度くらいしか変わらないなあ」

体温計に目をおとした一夏がそう口にする、冬二は「あっそ」と呟いて行ってしまった。

（なんなのかなあ？）

その後ろ姿を見送っている秋四に、となりの三春が笑いながら教えてくれる。

「あれでも心配してるんだよ、フユ姉は」

「しんぱい？」

「そうよ秋四ちゃん。咳がづらいようなら、今日学校休んでもいいのよ？」

でも、熱がないなら秋四は行きたかった。

（だって行かなかった日にかぎって、プリンが出たりするんだもん！）

「んーん、アキ行く！」

秋四は握りこぶしをつくって訴える。

だがそのあと、一夏と「マスクをつける、つけない」で揉めて、結局咳が酷くなってしまったのだった。



「そんなに嫌がることないじゃない、マスク。最近のはすごくかわいいんだよ？」

手を繋いで、秋四は三春と歩いていった。体育の授業は休ませるようにと、先生に伝えるためだ。

「ダメなの！ オトメのたしなみとしては、ゆるされないんだからっ。ごほ」

「なあに、それ」

三春は笑っているが、秋四はかなり本気だった。マスクはやはり、どこかっこわるい。つけている人が少ないし、恥ずかしいのだ。

「でも、ナツ姉も言ってたでしょ？ マスクはみんなに風邪をうつさないためにするんだから。アキのその理由じゃ、自分のことしか考えていないみたいだよ」

「う……」

「みんなに『アキのせいだ』なんて言われたくないでしょ？ 咳がとまるまで、少し我慢できない？」

こんなふうに秋四を諭すことは、実は一夏よりも三春のほうがうまい。一夏はやさしいが、自分もあまりしっかりしたタイプではな

いから、秋四に強く言うことができないのだ。秋四も一夏に言われたって、「ナツちゃんだってやってるじゃない!」と思ってしまい、素直に従うことができない。

(でも、ハルちゃんは違うの)

いつも静かに、秋四を見守ってくれているから。ふとしたときに、手を差し伸べて正しい方向へ導いてくれる。

「……………」

秋四はランドセルをおろして前のほうに持ってくると、無理やり持たされていたマスクを取り出した。

すると三春がさっと取って、秋四の耳にかける。

「取っちゃダメよ? 自分でかけられないでしょ?」

「はい」

できるとは言い切れなかったから、秋四はそんな返事をした。声
が、マスクのせいで今までよりも少し低くなった。

【第3話】四女・秋四の日常―3

秋四が教室に入り自分の席まで行くと、すぐにいつものふたりが近づいてくる。

「今日はおそかったねー。そのマスク、どうしたの？」

最初に話しかけてきたのは、芙美^{ふみ}だ。おとなしい女の子で、同じ女である秋四から見ても充分かわいいので、男の子に人気がある。

秋四はランドセルをおろして、教科書やノートを机に移しながら答えた。

「あのね、かぜひいちゃったみたいで。ごほっ。ハルちゃんといっしょに来たから、おそくなったの」

一緒に職員室に行って、『オトメのジジョウ』を話してきたのだ。結果、予定どおり四時限目にある体育は休むことになった。

「なあなああきよ！　きのうのシレン見たかつ？」

芙美との会話を遮るように、次に声をかけてきたのは勇吾^{ゆうご}。上級生のように髪の毛をツンツン逆立てたやんちゃ坊主で、いつも至るところに絆創膏を貼っている。

「シレンって昨日だったけ？　見のがしちゃったよう……ごほごほ」
なにせ昨日の秋四は、プリンのことで頭がいっぱいだったのだ。毎週楽しみにしているテレビアニメの放送を忘れるくらいに。

すると勇吾は「なんてこったい」と大袈裟に頭を抱える。

「昨日の『暗号』がなかなかむずかしかったからさ、たんてい団三人の力をあわせてどうと想ってたのに！」

「今も考えてたんだよ。でも、ぜんっぜんわかんないの」

『少年探偵団シレン』は、その名のとおり少年探偵団が活躍するアニメだ。秋四たちもそれを真似して、探偵団をつくっていた。ただし、こちらは女の子のほうが多いので『少女探偵団』と名乗っている。

この探偵団の活動は今のところ、シレンの最後にある暗号コーナ

ーの謎を解くことだけ。次の週に答えが発表されるので、それまでに解いてハガキを出そうとみんな必死になるのだ。

「じゃあ、あたしもいっしょに考えるから、ごほっ、暗号教えて？」
「おう！」

秋四が頼むと、勇吾は自分の席から自由帳を持ってきて、その暗号を書き出してくれた。

――期待をこめた目で。

（少女たんてい団のリーダーは、あたし）

それは秋四の両親が、とても有名な探偵であつたからだ。だからふたりは、一緒に探偵団をつくろうと決めたとき、秋四に「リーダーになってほしい」と頼んだ。

（あたしには、ひとつ力がある）

その力が事件解決に役立ったことはまだないが、「アキならだいたいようぶだよ」と三春に言ってもらえたから、秋四は頑張ろうと思っていた。

勇吾が教えてくれた暗号は、『イカが秋に変わるとき、音は変わらず鳴り響く。血の色もそのままに、では牛はどうなるか？』――一度聞いただけで、頭が痛くなりそうな文だった。

「イミわかんないね……ごほ」

「だろっ？ これを今日中にとこうぜ！ おれはガッコおわったらジユク行かないとないから、かえりまでにな」

誰よりも早く解きたがるのが、いつもの勇吾だ。

（だけど、ジユクって？）

これまで勇吾から、塾に行っているなどという話は聞いたことがない。

秋四が変な顔をしていることに気づいたのか、芙美が横から説明してくれた。

「ユウゴくん、ゲンキくんと同じジユク行くんだって。ゲンキくんのお母さんが、ユウゴくんのお母さんになにか言ったみたいなの」「こういうの、『たぶらかした』って言うんだろ？ほんと、めー

わくな話だぜっ」

そんな勇吾の言葉が、少し離れた位置に座っていた元輝げんきのところまで聞こえていたようで、声が飛んでくる。

「にがさないからなユウゴ！ おまえをちゃんとつれていかないと、ぼくがおこられるんだよっ」

「わかってるよ！」

勇吾と元輝はもともと、仲がいいわけではない。しかし、母親同士は結構仲がいいようで、たまにこういうことがあるのだった。

不意に、

「みんなっ、先生来たぞっ！」

戸のそばの席の、声かけ係りの子が小さな声で叫んだ。すると途端に教室内が静かになって、みんな自分の席へと戻っていく。

「じゃな、ジュギョウ中も考えておけよ！」

「また休み時間にね」

勇吾と芙美もそれにもれず、こそこそと自分の席へと戻っていた。



一時間目が終わったあとの、十五分間の休み時間。

いつもは笑顔で、秋四と一緒におしゃべりをする芙美なのに、今日の表情はどこか暗い。

「どうしたの？ フミち。ごほ」

「トイレがまんしすぎてもらったのか？」

大真面目に訊いた秋四の横から、勇吾がふざけたことを言った。

「ユウごほごほ！」

秋四が怒って叩く振りをすると、勇吾は絆創膏の貼られた鼻の頭をかきながら、「ごめんごめん」と笑う。

（もうっ、男の子ってすぐこうなんだから）

秋四が家にいるときは、女だらけでわからなかった。幼稚園では、

女の子とばかり遊んでいたから気づかなかった。しかし、勇吾と仲よくなってから秋四は、いろいろな発見をしたのだった。

当の芙美は、ふるふると首を振ってから答える。

「ちがうの。フミね、リカのキョウカシヨわすれたみたいで……さがしてもないの」

その顔が泣きそうに歪んでいるのには、当然理由がある。秋四たちの担任の瑞江先生が、忘れものに厳しい人だからだ。ばれたら確実にお尻ぺんぺんされるだろう。――しかも、みんなの前で。

「あきらめちゃダメよフミち！　となりにかりに行こ？　ごほ」

「え？　で、でも……フミ、となりに友だちいないし……」

「なら、おれがてきとーにぶんどってきてやるか？」

「そんなことしたらばれるう、ユウゴ」

勇吾なら本当に無理やり持ってきてきそうなところがあつたから、秋四は慌ててとめた。それからもう一度、芙美のほうを見て誘う。

「あたしもついてくから、行ってみよ？　ごほ。わすれものでおこられるのがいやなの、みんな同じだもん。きっとだれかがかしてくれるよ」

「う、うん――」

芙美はおとなしすぎて、ちょっと引込み思案なところがある。そういうところが結構三春と似ていて、だからこそ秋四は余計に、

「あたしがなんとかしなきゃ！」と思ってしまうのだった。

そうして芙美を引っぱっていったとなりのクラスでは、窓の近くに座っていた知らない女の子が、「自分が忘れたときはかりるからね！」という言葉つきで貸してくれた。

【第3話】四女・秋四の日常―4

四時限目の体育の時間、秋四は教室の窓から下のグラウンドを眺めていた。なにもしないで外に座っているだけでは寒いだろうということで、教室から見学することになったのだ。

みんなはドッジボールをしていて、楽しそうな声が二階まで響いてくる。

（いいなあ。あたしもいつしよにやりたかったな）

昼休みにたまにやったりするが、参加人数が全然違っていた。体育は二クラス合同でやるため、少人数でやるよりもずっと迫力があるのだ。また、適当に投げても結構当たったりする。

（あつ、フミちがあてられた！）

ボールの行方に集中し、こぶしを握りしめて下を見つめる秋四の耳に、

――コンコン

突然すべりこんできたのは、教室の戸をノックする音だった。

（んん？）

「だれかいるの？」

咄嗟に振り返って訊ねてみても、戸についている小さな窓からは誰の姿も見えないし、教室内に入ってくる気配もない。

（なんだろう？）

不思議に思った秋四は、窓のそばを離れて戸のほうへと向かった。ガラリと開けて、廊下の左右を見る。

（やっぱりだれもいな――ん？）

人はいなかったが、気になるものはあった。となりである二年二組の教室の前に、なにかが落ちているのだ。

秋四は少し迷ったが、結局教室を出てその『なにか』を拾った。

それは、飛行機の絵がついた青いハンカチだった。顔をあげる。

「あれ？」

また少し離れた位置に、ものが落ちていた。

（ナツちゃんみたいにドジな子が、ちょっとずつものを落としてったのかなあ？）

そう考えるとなんだかおかしくて、秋四は少しずつ前に進みながら、落としたものをたちを回収してゆく。

鉛筆、消しゴム、ハサミときて、最後の定規はトイレの前にあった。

（おトイレ……入っちゃおうかな）

いつもなら当然、授業中にトイレに入ることなどできない。しかし、誰もいない今なら入ったところではしなないだろう。

拾ってきた落しものをとりあえず手洗い場の上に置いて、秋四はこそこそとトイレに入った。

——不思議は、まだ続く。

「えっ？」

トイレから出てきた秋四が手を洗おうとしたとき、そこに置いたはずの落しものがなくなっていることに気づいたのだ。

（どこに行っちゃったの？）

昨日のプリンといい、今日の落しものといい。

（なんでみんな、あたしの前からなくなっちゃうの？）

なんとも言えない気持ち悪さを感じながらも、そのまま立ちつくしていても仕方がないから、とぼとぼと自分の教室へと戻った。

秋四を、さらなる不思議が襲う。

「……………な、に？」

誰もいないはずの教室。なにも変わるはずのない教室、なのに——秋四は気づいてしまった。さっきまでとは、明らかに違うことに。

（あたしには、ひとつ力がある）

目に入った風景を、そのまま憶えてしまう力。その力が今、秋四よりも先に異常を訴えていた。

（ちがうのは、どれ？）

高鳴る胸に手をあてながら、秋四はゆっくりと教室のなかを見まわしてみる。黒板、天井、机、椅子、窓……そして、教室の後ろのほうに目をやったとき、ひととき大きく心が跳ねた。

「ランドセル……？」

そう、違うのは、後ろの棚に並んでいるランドセルだった。人によって入れる方向が違うため、頭がこちらを向いているものがあれば、お尻がこちらを向いているものもある。だがそれは、最初からの違い。秋四が反応したのは、そこではなかった。

（変わったのは、どれ？）

頭のなかに切り取られていた、今日見たはずの映像と照らしあわせる。

「あ！ ゲンキくんのランドセルだ……」

しばらく悩んで、ちゃんと気づくことができた。

元輝のランドセルは、三時間目が終わったあたりまでは、確かにお尻がこちらを向いていた。しかし今、秋四に見えているのは頭のほうであった。

（なにかあったの……？）

すぐにでも中身を確認したい気持ちをこらえて、秋四はみんなが戻ってくるのを待った。再び窓から下を眺めながら、「早く終われ〜終われ〜」と電波を送っていたが、チャイムはそう簡単には鳴ってくれない。

秋四が待ち疲れた頃にやっと帰ってきたクラスメイトたちのなかから、元輝を捕まえて訴える。

「あのね、ゲンキくん。ゲンキくんのランドセル、なんかヘンなの。中身カクニンしたほうがいいよ？」

「ヘン？ ヘンってなにがだよ」

危ないからはずしていたのか、机のなかに入れてあったメガネをかけながら、元輝は不思議そうに首を傾げた。

それでも秋四は、しつこく食いさがる。

「とにかくヘンなの！ 見てみてよ？」

そんな秋四の様子を邪魔と思ったのか、元輝は乱暴に席を立つと後ろのほうへと向かった。そして自分のランドセルを棚から引っぱり出すと、「なんだっていうんだよ」と呟きながらも、なかを覗きこむ――動きが、とまった。

「――ない」

「え？」

恐ろしい表情を、秋四に向けて叫ぶ。

「入れておいたジユクのお金がないんだよ！」

――秋四が疑われたのは、当然のなりゆきだった。



昼の給食には、秋四があんなにも食べたがっていたプリンが出た。だが秋四には、喜ぶ気力も食べる食欲もなかった。

「とりあえず、お昼が終わってから考えましょう？」

担任の瑞江先生はそう笑ったが、どう見ても秋四を疑っている目だった。

（子どもはおとなが思ってるよりもね、ビンカンなんだよ）

口に出されなくても、気持ち伝わってくる。それはときに、口に出されるよりもずっと、つらいことがある。

「でも、あきよじゃないんだろ？」

「あたりまえだよ。アキちゃんそんなことする子じゃないもんっ」
訊いた勇吾に、芙美が答えた。

秋四たちは三人で机をあわせて食べていた。他の子たちは、いつもよりずっと机を離して丸くなっている。

「……………」

もちろん、秋四はやっていない。それは秋四自身が、いちばんよくわかっていて。しかし秋四には、みんなに疑われてしまうような理由があるのも確かだった。

（あのジカンに休んでたの、うちのクラスではあたしだけだったも

んね……)

それに――秋四の家は、両親がいない。そのため貧乏なのだということは、みんな知っていた。

「げんき出してよ、アキちゃん！ フミたちはアキちゃんの力知ってるから、アキちゃんのいうこと信じるよ」

今は箸すらも上手に動かせない秋四を、励ますように芙美が告げた。

「そうだぜ、あきよ。おまえとシンケイスイジャクやったときのクツジヨク、おれぜってーわすれないからな！」

勇吾も続ける。

そう、以前勇吾とランプで遊んだとき、秋四がほとんどのカードをとってしまったのだった。秋四は一度見れば場所を憶えてしまうのだから、当然といえば当然の結果なのだが。

「……ありがと、フミち、ユウゴ」

「あやしいのはさ、やっぱその『おとしもの』の話だよな」

「だね。きっとそれ、アキちゃんをキョウシツからはなすためにやっただよ！」

「うん」

そうかもしれないと、秋四自身も考えてはいた。だがこの話自体、落としたものが消えてしまったことで、秋四のつくり話だと疑われていたのだ。よって、芙美と勇吾以外に信じている人はいないようだった。

「食べたらチョウサ始めようぜ！ おれたちの、キネンすべきサイショのジケンだっ」

「がんばろうね！」

意気ごむふたりが、とても勇ましい。

(よかった……)

疑われているのはつらかったが、ちゃんと信じて笑顔を向けてくれる人がいるということは、秋四にとって心の底から嬉しいことだった。

三人して給食をまるで吸いこむかのようなスピードで食べ、プリンを飲み干し、すぐに調査へと入った。

（お昼休みはかぎられてる）

今のうちに犯人を見つけられなければ、保護者として一夏を呼ばれてしまう可能性があった。しかし、忙しい一夏にそんな迷惑はかけたくない。

そう考えたら、秋四も俄然やる気になる。

（ゼツタイ見つけてやるんだから！）

秋四たちがまずやったのは、聞きこみ調査だ。

「『キホンは足からだ』って、よく言うだろ？」

「それ、タンテイじゃなくてケイジさんじゃなかったっけ」

そんな会話をしながら、証拠品として手に持っているのは、秋四が描いた飛行機ハンカチの絵だった。鉛筆や消しゴムはみんながよく使っているようなもので、その持ち主を特定するのは難しい。だが、はっきりと模様の入ったハンカチなら、まだ犯人をしばらくこめるのではないかと思ったのだ。

さすがに全校生徒に訊いてまわるのは無理であるため、同じ二年生のクラスを順にまわって、飛行機の柄に見覚えのある人を捜した。よくあるイラストなせいか、五人ほどの名前があがったが、ゼロよりもずっといい。

ひととおりまわりおえた秋四たちは、あまり人目につかないように、一階の階段の下ところで話しあうことにした。そこは、暗いうえに狭くて立ちあがることもできない場所だが、秘密の話をするにはちょうどいい場所なのだ。

「――あれえ？ となりのクラスの子が、ひとり入ってるね」

リストを見るときだけ、光のあるほうにかざして確認しながら、呟いたのは芙美だった。

「でも、となりのやつはいっしょにタイクやってたじゃん」

反論した勇吾に、芙美は即返す。

「それ言うなら、ほかのクラスの子だってジュギョウやってるもん」

「あ、そうか……」

しかし、考えれば考えるほど、体育のあの時間帯以外、教室に人がいなくなった時間はないのだ。

秋四は、なにか推理に使える記憶はないかと、ふたりの話を聞きながら脳内を探していた。

「ん？　でも、おかしくねえ？　おれらがドッジボールやったとき、一組と二組同じ人数だったよな？」

「そうだね、チョウセイしなかったもんね。――ああ、そっか！　じゃあやつぱり、ひとり足りないんだよ。だってフミ、となりのクラスにキョウカシヨかりに行ったとき、黒板見たもん。今日のケツセキはゼロって書いてあった」

「じゃあひとり、あきよみたいに見学してたやついるんだなっ！？」
その会話と連動して、秋四は脳内から映像を掘り起こす。

「……でも、あたし見てないよう？　となりのクラスの戸があいてたから、落しものひろいに行くときちよつとのぞいたけど、だれもいなかったの」

秋四が告げると、勇吾はなぜか大袈裟にため息をついた。

「バカだなあ、だからこそあやしいんだろ！？　見学してるはずなのに、なんでキョウシツいないんだよ」

「ホケンシツかもしれないよ？」

「う……っ」

どうやら芙美のほうが、一枚うわてだったようだ。

「と、とにかくッ！　カクニンすればわかることだろ？　二組に行ってみようぜ」

言葉に詰まって、暗がりから飛び出した勇吾は、

――ごちんっ

「つつつてええええ」

階段の陰のため、上が斜めになっていて低いことを忘れていたのか、思い切り頭をぶつけてしまったのだった。

【第3話】四女・秋四の日常―5

「答えは、『イス』だよ」

放課後の教室で、声をかけてきた元輝は、秋四たち三人を前にそう告げた。

「ぼくが行ってるの、エイゴのジユクだからわかったんだ。『イカ』はローマ字で書いてギャクから読めば『秋』、『音』はギャクからよんでも『音』。血の色――『赤』もそう。それで『牛』は、『イス』になる」

それはシレンの暗号の答えだった。

「ゲンキくん……」

「うたがって、ごめんね」

――そう、秋四たちが二組の教室へ行ったことで、結果的に犯人がわかったのだ。

なんということはない、芙美について二組に行ったとき、秋四は二組の後ろの棚のところまでちゃんと見ていたからだ。あとは元輝のランドセルのときと同じで、どのランドセルが動いたのか考えればいいだけだった。ランドセルは逆さまになっていたわけではなかったが、些細な違いでも秋四は気づくことができた。秋四だから、気づくことができた。それは、秋四の力がまぎれもなく本物であることの証拠に他ならなかった。

勇吾が持ち前の大胆さでそのランドセルを勝手に調べてみたら、なかから元輝の月謝袋が出てきた。ついでに、例のハンカチも。つまりこの事件は、秋四たちが推理したとおり、体育を休んでいたそのクラスの男子の犯行であり、その名前は秋四たちが調べていた名前とも一致していた。

「……あたしじゃないって、ちゃんとわかってくれたんだったら、いいよ」

元輝が悪いわけではない。それがわかっていたから、秋四はそう

応えた。そして続ける。

「それより元輝くん、よかったらたんてい団入らない？」

「えっ？」

「ちょっと待てあきよ！　なんでゲンキなんかさそうんだよっ？」

後ろで見守っていた、勇吾が口を挟んできた。

「だって、ユウゴより頭よさそうなんだもん」

「なんだとーっ!？」

「アキちゃん、ホントのこと言いすぎ」

芙美の鋭いつっこみも飛ぶ。

「こら、ふみ！　おまえまでなに言ってるんだよ」

「あはは」

気がつくと、追いかけてごっこになっていた。

気がつくと、秋四のマスクも咳も、なくなっていた。

結局その日は勇吾も元輝も塾を休んで、四人で疲れ果てるまで遊びつづけたのだった。

【第4話】三女・三春の日常―1

『普通』とは、なんなのだろう。

（一体どういうことを、そういうんだろ？）

「普通、両親が有名な人だったら、娘は嬉しいもんじゃない？」

親友の亜里紗ありさにそんなことを言われてから、三春みはるはずっと考えていた。

「アタシだったらきつと、すごく誇らしいし、みんなに自慢したいと思うと思うなあ」

心から羨ましそうに告げる亜里紗に、三春はあまり同意できなかったからだ。

（確かにね、嬉しいんだよ）

でもそれ以上に、三春はみじめだった。

有名な探偵であった三春の両親。もちろん周りの人々は、そんなふたりの娘たちにいろいろな期待を寄せてくる。当然三春に対しても、それは変わらなかった。

（だって、周りの人は知らないもの）

『わたし』がいかに関立たない存在か――。

三春にとっては、その期待がひどく苦痛だったのだ。

その理由は簡単で、三春以外の三人はそれぞれに力を発揮しているのに、三春だけがなにもなかったからだ。三春はみんなの後ろをとぼとぼについてゆくだけ。まだ両手で足りる歳の秋四ですら、三春の前を歩いていた。

きつとそれが、普通。

（じゃあ普通になれないわたしは、どうしたらいいの……？）

もし両親が生きていたなら頃なら、気軽に訊けたのだろう。しかし今、三春が相談できそうな相手は、猫のじゃあくらいしかない。あたりまえに『普通』という言葉を使う亜里紗には、きつとわかってもらえないだろうという気持ちがあった。

——そう、思っていた。
三春をからかうように、相談を持ちかけてきたのは亜里紗のほうだった。



「あのね……なんか、部活のみんながピリピリしてるんだ」
それはお昼休みのことだった。

亜里紗が「あまり人に聞かれない話があるの」と言うので、ふたりで校庭を挟んだ向こう側のベンチまでやってきたのだ。

亜里紗はいつもとは違う、元氣の見えない表情で俯いたまま続ける。

「最近全然賞とれないし、部室の備品がなくなったりしてさ……」
「部活って、合唱部だったよね。そういえば全然大会の話聞かないけど、うちの合唱部って強いんじゃないかった？」

三春は合唱に興味があったわけではないが、去年亜里紗が騒いでいたのを憶えていた。小四から合唱を始めた亜里紗は、合唱の強いこの中学校に入れることをとても楽しみにしていたのだ。

亜里紗は大袈裟にひとつ、ため息をついてから答える。

「そのはずんだけどね……顧問の先生だって変わってないのに賞がとれないから、一年のせいじゃないかって雰囲気になってきてさ……」

「えー？ なによそれ」

呆れた三春がついていた手に力をこめると、座っていたおんぼろベンチが「ぎしり」と大きな音を立てた。

ふたりして咄嗟に、動きをとめる。

そもそもそのベンチは、あまりにもおんぼろなので普段は誰も座らない。みんな校庭に遊びには来ても、このベンチのほうまで人が来ることはほとんどなかった。だからこそ、内緒話にはもってこいの場所だったのだが——

「やだ、ほんとにおんぼろだあ」

「わたしたちが重いわけじゃないよね!？」

まさかここまで酷いとは思わなかったから、真面目な話をしていくというのにふたりは笑い出してしまった。

(でもよかった。亜里紗、ちょっと元気になったみたい)

トレードマークのポニーテールが、元気を取り戻してくるくる揺れている。

それを横目に見て、三春が少しだけ安心していると、笑いおえた亜里紗はとんでもないことを言い出した。

「――ねえ三春。なんとか、ならないかな」

「へ？」

自分でも間抜けだと思ってしまうような声をあげた三春の手を、亜里紗が強く掴んでくる。

「賞がとれないのは、仕方ないことかもしれないけど……物が失くなったりするのはさ、『探偵』ならなんとかできるでしょ？」

「あ――」

(普通じゃないわたしは、役に立たないのに?)

戸惑う三春とは対照的に、亜里紗の目はまっすぐに三春を貫いている。手にこめられた力が、その切実さを物語っていた。

「ごめんね。三春がこういうこと頼まれるの、嫌いだっていうのはわかってるの。でも、アタシ……」

(ああ、そっか)

亜里紗はちゃんとわかったうえで、自分に言っている。

『あのとき』も、『今』も――。

それがわかったから三春は、深く頷くことができた。

「わかったよ。役に立てるかどうかわからないけど、やるだけやってみる」

親友の願いを、叶えてあげたかった。

「ほんと? ありがと三春っ」

よほど嬉しかったのか、三春に抱きつく亜里紗。

しなるベンチ。

——落ちた、背もたれ。

「きゃあ!？」

声をそろえたふたりは、背もたれと一緒に仲良くベンチの向こう側に落ちてしまった。

「もうっ、なんなのよこのベンチ!」

「これが小学校なら、とっくに撤去されてるわね」

さいわいにして怪我はなく、起きあがったふたりは愚痴をこぼしながら制服についた土を払う。

ふと、目があった。

「……ふふふ、馬鹿みたいね、アタシたち」

「ほんと、コントじゃないんだからさ」

しばらくそうして、笑っていた。

校庭を走る生ぬるい風も、一緒に笑っていた。

【第4話】三女・三春の日常―2

放課後、三春は亜里紗に連れられて合唱部の部室へとやってきた。
――そう、簡単にいうならば音楽室だ。

すでに何人かの部員が準備を始めていて、明らかに部員ではない三春の登場に好奇の視線を寄せてくる。

（ジャージのなかにひとり制服じゃ、やっぱり目立つなあ）

文化部なのだから制服で活動するのだろうと思っていた三春は、大胆に裏切られていた。

その理由を亜里紗に訊いてみると、

「腹筋を鍛える運動もするからね。うちの部は超本格的なのよ！」
という答えが返ってきたのだった。

「――あら亜里紗、どうしたの？ あの子。入部希望？」

音楽室の隅で座っていた三春は、聞こえてきた声に目をやる。『あの子』というのは、当然三春のことだろう。

そんな言葉を亜里紗にかけていたのは、三春も知っている亜里紗の友だちだった。

亜里紗はちらりと三春のほうを見たあと、実になにくわぬ声音で答える。

「まあそんなとこ。今日はとりあえず見学するって」

（わあ、役者だなあ亜里紗。わたしだったらきつと、おどおどしちゃうのに）

亜里紗は演劇部にも向いているのかもしれないと、三春は思った。
一方、ごまかされた亜里紗の友だちは「ふーん」と応えると、亜里紗の手をとって部員たちの輪のなかに入っていく。

その後ほとんど人が集まってきた、最後に顧問である音楽の菊池先生がやってくると、いよいよ部活が始まった。最初は亜里紗が言っていたように腹筋を鍛える運動で、横になり背中を床につけたまま、まっすぐに伸ばした脚を床から数センチ離した状態でとめる

ということをやっていた。

（あれ、見かけよりかなりきついんだよね）

体育の授業で、三春も何度かやったことがある。床から何センチ足を離すかでつらさは変わってくるのだが、五〇センチでも三春は十秒と持たなかったのだ。

合唱部の面々はさすがに慣れているのか、床から十センチでもみんなそつなくこなしている。

（すごいなあ。さすが、強いって言われているだけある）

亜里紗は大丈夫だろうか、心配になった三春が目をやると――険しい表情と視線がぶつかった。

（あ！ そうだった……）

感心している場合ではない。

その視線から苦しさ以外のものを感じ取って、三春は自分の目的を思い出した。

今日見学にやってきたのは、もちろん入部するためではないのだ。亜里紗が言っていた、備品が盗まれるという事件の調査のため。亜里紗の話によると、当然学校側も犯人を捜しているらしい。しかし、先生たちが大っぴらに生徒個人を疑ってはあとあと問題になってしまうから、調査はほとんど進んでいないということだった。

（今まで盗まれたものは――）

楽譜ファイルに楽譜立て、出席状況を示すための名札、ベレー帽など、そう高価なものではない。それらはいつも音楽室に置きっぱなしで、音楽室自体鍵をかけない場所だから、特に犯人の特定が難しいという。最近はそのらを鍵のかかる音楽準備室に移しているが、それでも被害は続いているらしい。

ひととおりの運動が終わって、次に始まったパート練習を、三春は探るように眺めていた。十人前後がそれぞれのキーボードの周りに集まって、音を拾っている。

（確かに、雰囲気悪いなあ）

ギスギスしているというか、モヤモヤしているというか、少なく

とも明るい雰囲気ではなかった。特に、やはり亜里紗が言っていたように、一年生へ向けた上級生の視線がきついようだ。

（こんな調子で、全員であわせたときうまくいくの？）

勝手に心配していた三春だったが、それでも最後に全員であわせたときには、意外にもしつかりとあっていた。指揮をする先生がうまいせいもあるだろうが、これで賞がとれないとは思えないほど、きちんとまとまっていたのだ。

（わたし、耳だけはいんだ）

それは、三春が小さい頃から家のなかで音楽ばかりを聴いていたから。合唱そのものがよくわからなくても、音のハーモニーとしてならきっちりとした評価ができる。

そして、そんな三春の耳でも、亜里紗たちの歌は素晴らしい出来だと思えた。一年生に問題があるなどと、信じられない。むしろ、一年が入ったこの時期でこれだけ歌えたら、充分なのではないかと思ったほどだ。

だから三春は、安心して音楽室のなかを楽しげに踊りまわる音を聴けていた。

だが――そのうちに、ちらりちらりと自分を盗み見る存在に気づいてしまう。それは亜里紗ではなく、先ほど三春のことを尋ねていた亜里紗の友だちだった。

（わたしのこと、警戒しているのかな）

気づかれないように、三春はひとり苦笑する。

その子は音楽室に来てからずっと、亜里紗にべったりだった。パートが同じであるせいもあるだろうが、常にとなりを離れない。今だって当然のように、亜里紗のとなりで口を開けている。

（あの子も、わたしと同じなんだ）

三春はそう直感する。

もともと、人と仲良くなるのが得意ではなかった三春。亜里紗と仲良くなれたのも、小学校でずっとクラスが一緒で、かつ、家が近かったからという理由があった。それは慣れ以外のなにものでもな

く、今の三春に亜里紗以外に親しいといえる友だちなどいない。

「亜里紗がいればそれでいい」

「他の友だちはいない」

そんなことを思っていたわけでは、もちろんないのだが、亜里紗以外の友だちをつくる機会に恵まれなかったのだ。

(……これも、言い訳でしかないのは、わかってるんだけどね)

自分は亜里紗に依存していた。きっとあの子もそうなのだろうと、三春は分析する。

亜里紗は三春と違って、誰とでも仲良くなれるタイプなのだ。しかし、三春の性格を気に入っているのか、他の友だちよりも三春と一緒にいることが多かった。だからこそ三春自身も、「自分は亜里紗の親友なんだ」と胸を張って言うことができたのだが――

(あの子は、部活のあいだけ?)

それとも部活が終わったら、亜里紗以外の『対象』がいるのだろうか。

結局部活が終わるまで、三春はずっとそのことを気にしていた。

おかげで、帰りの準備中に怪しい動きをしている人がいないかどうか、ちゃんと見ることもできなかった。



(役に立ちたい)

三春がそう強く思えたのは、亜里紗のおかげだ。今までは「どうせ……」という気持ちのほうが強くて、三春は自分から動こうとはしなかった。普通じゃないことを言い訳に、やはり逃げていたのだ。(でも、それじゃあ亜里紗だって呆れちゃう)

合唱部のあの子に盗られる――などと本気で考えているわけではないが、なにもしないのは不安すぎてダメだった。

そんな三春が助けを求めて向かったのは、ふたりの姉のうち下のほう、冬二が通う高校だ。

（フユ姉ならしっかりしているし、わたしなんかよりずっと頭がいいもの。探偵らしいこともたくさん知っているから、きっとなにかいい案をくれるはず——）

そんな気持ちで向かった三春の想いは、しかしあっさりと打ち碎かれることになる。

人に頼んで冬二を呼んでもらうと、冬二は剣道着に身を包んだまま校門まで走ってきて、

「なにしに來たんだっ、三春！」

なにかに怒っているようだった。

「あのね、相談があつて……」

「相談？ 家のことか？」

「ううん、学校の——」

あからさまに部活の途中だったから、三春は手短に事情を話した。すると冬二は、大袈裟に頭を抱えるジェスチャーをしてから口を開く。

「あのなあ、三春。俺は忙しいんだ。家の外でまでおまえたちの相手はしてられない」

それからびしっと、三春の顔の前に人差し指を突き出して続けた。

「おまえが自分でなんとかしろ！」

「そんなあ」

「大丈夫だ、おまえだって一応西ノ宮夫妻の娘なんだからな！」

「フユ姉」

「ほら、帰った帰った」

そうして三春は、アドバイスもなく追い返されてしまったのだった。

「フユ姉の馬鹿っつ！」

三春がせっかく決心してやってきたというのに、あんまりな態度に腹が立つ。

家に帰ってもその怒りがおさまらない三春は、冷蔵庫をあけたら蓋に冬二の名前が書いてあるプリンがあったので、思わず手に取っ

てしまった。

（もうっ、食べちゃうからね！）

西ノ宮家では、名前の書いてあるものは当然、その持ち主以外は食べない・使わないのがルールだ。だが、今の三春にそんなルールなど関係ない。

（わたしがお姉ちゃんに頼るなんて珍しいことなのに……！）

そんなときでも力になってくれない冬二が、憎らしかった。いちばん上の姉である一夏が家にいれば、代わりに相談もできたのだろうが、まるで狙ったかのように今日はいない。

スプーンを右手に、プリンを左手に居間にやってきた三春は、ベリベリっと豪快にプリンのフタを剥がした。不思議なことに、それだけで少し気分が落ち着く。

「……ハルちゃん？ かえったのー？」

「えっ!？」

しかし、二階から妹の秋四の声が聞こえてきて、今度は心臓が飛びあがった。

（し、静かだから寝てるかと思った!）

そして階段をおりてくる音。

（や、やばい！ さすがに隠さないと……）

こっそり食べてしまってから知らないフリをすれば、誰が食べたのかばれる確率はかなり低い。しかし、食べているところを見られてしまうのは論外だ。

そこで三春は、慌てて仏壇の上にプリンを載せた。そう、この家では、いつでも両親に見守っていてももらえるようにと、仏壇は居間に置いてある。

（仏壇なら、プリンが載っていても不自然じゃない！ ……蓋が開けてあるのはともかくとして、アキをごまかすだけならこれで充分っ。スプーンはポケットに隠したら完璧だ!）

——などと思っていた三春は、やはり甘かった。秋四をかわして二階の自分の部屋へ戻ったあと、こっそり下に戻ってくると、プリ

ンはちゃっかり消えていたのだった。

（ああ……プリンまでわたしを裏切るなんて！）

そもそも冬二のものである以上、秋四を問い詰めるのも気が引けて――

その日三春は、すり寄ってきたにやあまで無視して、なんともいえない気持ちで布団にもぐりこんだ。

【第4話】三女・三春の日常―3

翌日の昼休み。

「ね、亜里紗。この前の大会のビデオ、誰か撮ってないかな」

三春はそのまま諦めるのが嫌で、授業中ずっとなにかいい手立てはないかと考えていた。そうして唯一思いついたのが、それだった。昨日背もたれを壊したばかりのベンチに、それ以上壊さないよう慎重に座りながら、亜里紗は頷く。

「あー、先生が持ってるよ」

「先生って、音楽のだよね？」

「そう、菊池先生。でも、なんで？」

不思議そうに首を傾げる亜里紗に、三春は自分の考えを明かした。「昨日見学してて、すごくレベル高いなあって思ったんだ。あれで賞がとれないとは思えないの。ビデオ見たらさ、他の学校がもっとレベル高かったのか、それとも大会のときだけうちの調子が悪かったのか、少なくともそれはわかるじゃない？」

亜里紗の動きが、不意にとまる。

「……亜里紗？」

（ベンチが音を立てたわけでもないのに、どうしたの？）

不思議に思っ顔を覗きこむと、亜里紗も不思議そうな表情をしていた。まるで目からウロコが落ちたような顔だ。

「――そっか、そうかもね。おかしいと思ってたの。大会前にやる合同練習会では、結構褒められるからさ。でも大会のビデオの自分たちの合唱聴くと、そうでもなくて、アタシたちはいつもああいう感じで歌ってるんだと思ってたけど……もしかしたら、大会のときだけあなのかもしれないんだよね」

「あれっ？　もしかして、大会以外で自分たちの声録音したやつ、聴いたことないの？」

「ないよ。だから感心してるんじゃない」

亜里紗はそう苦笑してから、

「三春、もっと自信持ちなよ。三春も充分すごいんだからね！」

「すごいって、なにが？」

「発想が、普通じゃない」

「う……」

ズキンと来た。

ちゃんと、わかっている。

（わたしは『普通じゃない』から、役に立たないんでしょ？）

三春は急に泣きたくなった。

それでも、役には立ちたかったから、必死に我慢する。

「なんて顔してるのよ」

俯く三春の隣で、亜里紗が――笑った。

「『普通じゃない』って、褒め言葉だよ？」

「えっ？」

思わずあげた三春の顔に、亜里紗の手が伸びる。そして両頬を掴み、左右にひっぱった。

「笑ってよ三春！ 一体なにを悩んでるのか知らないけど、アタシ、

三春のそういうところ結構気に入ってるんだから」

「痛い痛いっ、はなひて、ありさ」

「やだ、三春のほっぺってば超柔らかい！」

「あほばないで」

口の動きが限定されているから、うまく喋れなかった。しかし亜里紗が手を離す様子はなく、仕方がないから三春も反撃に出る。

「ちよ……っ、三春！ アタシがわき腹弱い知ってるでしょ！」
「？」

そんな苦情は無視して、くすぐり大作戦だ。

やがては亜里紗もくすぐるほうに転じて、おんぼろベンチの上で壮絶なバトルが繰り広げられる。

その結果――ふたりよりも先に、ベンチが耐えられず悲鳴をあげた。

「えっ!？」

「うわあっ」

メキメキと酷い音を立てて、まんなかからまっぴたつに割れたのだ。おかげでふたりの身体は中心に傾き、互いの頭が交錯する。

——ゴツン

と、鈍い音がした。

「いったあ……」

「今、いい音したねえ」

(学習しないなあ、わたし)

頭を抑えながら、三春は思った。

だが学習していないのは、亜里紗も一緒だ。

(わたしは確かに、普通じゃない。でもわたしだけが、特別ってわけでもない)

三春にそれを教えた亜里紗は、「それでいい」と口にした。

——嬉しかった。

三春にとっては、それで充分だったのだ。

「……ふふっ」

「なに泣きながら笑ってるのよ、気持ち悪いわね」

毒づきながらも、亜里紗だって笑っている。

(今なら、訊けるかな)

三春は思い切って、『あの子』のことを訊いてみた。

すると、落ちた割れ目から身体を起こしながら、亜里紗は口を開く。

「あー、あの子ね。確かにアタシのこと、気に入ってくれてるみたいんだけど」

「うん」

「自分のことしか考えてないみたいだから、ほんととはちょっと苦手なの」

亜里紗は苦笑しながら、三春に手を差し伸べる。

「……わたしは？」

「ん？」

「わたしも、自分のことしか考えていないかもしれないよ？」

すると亜里紗は、三春の手を引くのを一瞬とめると、

「――どこがっ？」

「うわっ」

急に力をこめて、ぐいとひっぱった。

（肩はずれるかと思った！）

「亜里紗っ！？」

「あのねえ、三春が自分のことしか考えてないようなキャラなら、そもそも最初から相談しないんだから。むしろアタシのほうが、三春がそういうの嫌なの知ってて相談したんだもの、問題あるわよっ」
悪びれもなくにつこりと笑う。亜里紗はやっぱり強くて、かわいかった。

「……わたし、亜里紗みたいになりたいな」

「馬鹿なこと言ってないで、ほら、行くわよ！」

結局限界まで壊してしまったベンチから逃げるように、亜里紗が走り出す。

「行くってどこへ？」

「大会のビデオ、見るって言ったでしょ？」

「あ、そうだった！」

昼休みの時間はまだ充分にある。ふたりは痛む頭――ばっちりたんこぶになっていた――をこらえながら、校庭を全力疾走で横切ったのだった。



まるで体育の時間にマラソンを走らされたあとのように、ぜいぜいと息を切らせて職員室に駆けこんだ三春たちは、昼食を終えてくつろぐ先生たちの視線を大胆にふたり占めた。それも、ただの視線ではなく珍獣を見るような視線を、だ。

「どうしたんだ？ そんなに急いで……なにかあったのか？」

代表して声をかけてきた担任の先生をごまかし笑いでかわして、音楽の菊池先生のもとへと向かう。先生たちの机は大体担当学年ごとにまとまっているが、音楽の先生は全学年を受け持ったため、校長先生や教頭先生と同じ、職員室の奥のほうに机があるのだ。

別に悪いことをしようとしているわけでもないのに、小心者のふたりはついこそそと身をかがめて歩いてしまう。

そんなふたりが自分を目指してやってきているのだと気づいたのか、菊池先生のほうから声をかけてきた。

「亜里紗さん？ ……と、昨日の見学の子ね。どうしたの？」

やっと声の届く位置までたどりついたふたりは、さらに近づいて、菊池先生にしか聞こえない小さな声で訴える。

「あのね、先生。このあいだの合唱部の大会のビデオ、もう一度見せてほしいの」

菊池先生はあからさまに、眉間にしわを寄せた。

「――なぜ？」

合唱部で起こっている出来事は、最終的にはすべてこの菊池先生の責任になる。部員でもない三春が、負けた大会のビデオを見ることをよく思っていないのかもしれない。

それでも、亜里紗が丁寧に事情を説明すると、最後にはちゃんと頷いてくれた。

（伝説の名探偵、西ノ宮夫妻）

その娘である三春。

さらに、三年前までこの中学に通っていた冬二が、とても優秀な生徒であったからこそ、菊池先生はそれを許したのだろう。

三春はそう予想する。

（肝心なときになにもしてくれないなんて、本当は怒る資格もなかったんだ）

三春はこの学校に通っているという事実だけで、充分冬二に助けられていた。

その事実気づいた三春は、心のなかで冬二への感謝の言葉を紡ぐ。そして、冬二の面目を潰すわけにはいかないと気合いを入れて、音楽室へと移動した。部屋の隅にあるテレビの前に陣取ると、両の耳に神経を集中させる。

菊池先生自身気になってよく見ていたのだろうか、デッキにセツトされたビデオテープは、少しの隙もなくピタリと問題の箇所から始まった。

「あ——!？」

すぐに、わかった。

(なに、これ……)

昨日三春がここで聴いた音と、全然違っていたのだ。全体的に歪んでいる。

(これは——)

「どう？ 三春」

急に動きをとめた三春が気になったのか、亜里紗が顔を覗きこんだ。

三春は、あえてなんのフォローもない言葉で答える。

「……昨日聴いたのはね、これで賞がとれないなんておかしいと思っただけ、今流れているのは反対。これで賞がとれるほうがおかしいというレベルよ」

「あなたになにがわかるっていうのよ!？」

(え……っ?)

それに反応したのは、亜里紗ではなく菊池先生のほうだった。

「先、生……」

授業中でもいつも穏やかな笑顔を浮かべ、怒鳴り声など聞いたことがない。菊池先生は当然部活でもそうだったのか、亜里紗が放心したように呟いた。

三春とて、驚かなかったわけではない。だがそれ以上に、ビデオのなかで行われている『あること』に、驚いていたのだった。

「——うん、そうだよ、先生。本当はわたしなんかよりずっと、

先生のほうがちゃんとわかっているはず」

「え……？」

「音が濁っているでしょ？」

「な……っ」

「わたしね、先生。他のことはなんにもできないけど、耳だけは自信があるんです。各パートにひとりずつ、わざと音を外している人がいるわ」

「ほんと！？ 三春っ」

「……っ」

菊池先生は信じられないものを見るような目で三春を見つめたあと、リモコンを片手に何度も操作した。何度も、同じ歌を聴いた。しばらくそれをくり返していたが、やがて諦めたように手をおろし、

「わからないわ……」

そう呟いた。

「ハーモニーがおかしいとは思っていたの。でも、どこがおかしいのか、正確にとらえきれなかったのよ」

「だってすごく上手にやっているもの。半音くらい違ったら、大胆に音が濁るから誰にでもわかるけど、彼女たちは……多分ね、合唱をやらないわたしが頑張って出した高いドと、亜里紗の出した高いドの違いくらい、微妙なラインで音を狂わせているの。ひとりだったら気づかなかったかもしれない。四人が同時に音を狂わせようとしているからこそ、全体に共鳴してこんなにも歪んだ音になっているのよ」

（自分でも驚いた）

まさかこんなにはっきりと、違いがわかるとは思わなかったから。今までこういうふうに分の耳を使おうとしたことがなかったから、三春自身気づかなかったのだ。

「わざと音をずらしている人もわかるわ」

テレビ画面に指をつけて、三春は続ける。

「この人とこの人と、あと、この人とこの人」

「あ……っ!？」

息を呑んだのは、またしても菊池先生だ。

「先生もしかして、心当たりあるのっ？」

亜里紗が尋ねると、菊池先生はつらそうに眉をさげた。

「……四人とも、合同練習会するとき、光ヶ原中学校の生徒と仲良く話していたわ……」

「それって――」

今度は亜里紗も息をとめた。

ふたりの視線がついと、もう誰も操作していないテレビのほうへと向けられる。三春もそれを追うと、画面のなかの亜里紗たちはすでに歌いおわっていて、その光ヶ原中学校の合唱部による歌が始まっていた。

「彼女たちが、優勝したんだ？」

（確かに上手い）

でも昨日の、亜里紗たちほどではない。

「そう。うちの中学の、いちばんのライバルだって。だから去年までは、ずっと銀賞だったらしいの」

亜里紗の答えに自然と、顔を合わせる三人。

（考えたくはない）

でも、考えられる可能性がひとつしかない。

「先生……」

その表情があまりにも痛くて、呟いた。三春の頭を、ぽんぽんと叩いて。

「――ありがとう。あなたの『耳』を、信じるわ」

菊池先生は、それでも微笑んだ。

【第4話】三女・三春の日常―4

その放課後、菊池先生は三春が指摘した四人を呼び出して、問いただいたらしい。生徒全員を疑ってかかるとどうしてもしこりが残るが、個人さえ特定できてしまえば、教師とて強気に出ることができるとだ。

（案の定、四人はすぐに白状したんだって）

光ヶ原中学の、こともあろうに父兄に頼まれて、そんなことをしたのだという。しかも、お金までもらって――。

当然ながら備品の件も彼女たちの仕業で、とにかく嫌がらせをするのが目的だったようだ。

「ほんつつつと、くだらないよ！」

肩の荷がおり、すっきりとした表情の菊池先生からすべてを聞いたあと、三春たちは帰途についていた。

亜里紗は怒りがおさまらないようで、先ほどからひとりで大声をあげている。

「合唱はきれいな心で歌うから、きれいな歌に聴こえるのよっ！ね？ 三春だってそう思うでしょ！？」

「う、うん、まあ……」

「それをなによつ、姑息な手段を使って金賞取ったって、汚い心じや汚い歌しか歌えないわ！」

「そ、そーだね」

（気持ちはわかるけど、正直ちょっと恥ずかしいよ……）

三春はキョロキョロと辺りを見やりながら、心のなかで思った。

今は実に一般的な下校時刻で、周囲には他の生徒たちがたくさんいるのだ。よって、ふたりが忍び笑いに囲まれていることは、説明するまでもない。

そんななか、不意にかかる声。

「元氣いいねえ。亜里紗ちゃん、だっけ？」

「えっ？」

その角砂糖のように角ばった甘い声を、聞きなれている三春はすぐにわかった。

だが亜里紗は振り返り、そして凍る。

「み、み、み……はるのお姉さん？」

「ぴんぽーん」

実に男前な、冬二だ。男前すぎて、女のファンがやたらと多い。

かくいうこの亜里紗も、冬二の隠れファンだった。——いや、全然隠れていないかもしれない。

「こ、こんにちは！ 三春がいつもお世話になってますっ」

「亜里紗、それちょっと違う……」

「あははっ、面白い友だちだな、三春」

怒っているように見えた昨日とは違い、今日の冬二は機嫌がよさそうだ。

（——あれ？ でも、おかしいな）

いつもならまだ部活をやっている時間なのに、どうしてこんなところにいるのだろう。

「フユ姉、部活は？」

気になった三春が尋ねると、冬二はにやりと笑って答える。

「問題です。俺は今何年生でしょう」

「三年！ ……って、あー、引退しちゃったんですか？」

答えたのは亜里紗だった。

（そういえば今朝、「今日から早く帰れるかも」って言っていたっけ）

思い出しながら、三春はふたりの会話に耳を傾ける。

「まあな」

「ああん、冬二さんの試合見られなくなるなんて、残念だわ」

（亜里紗、キャラ変わってる……）

我が姉ながら、恐ろしい威力（魅力？）だ。

「まあまあ、趣味としては続けるつもりだからさ、今度うちに遊び

に来るといいよ」

冬二もそんな自分をよくわかっていて、わざと愛想のいい笑顔で答える。

（みんなして『にゃあ』をかぶりすぎよ！）

「ぜ、絶対行きます、超行きますっ！！」

「亜里紗、家向こうでしょ」

盛りあがるあまり、いつもは手を振り合う交差点をそのまま通りすぎそうになって、三春は声をかけた。

すると亜里紗は、一瞬だけ恐ろしいほど鋭い視線を三春に投げかけたあと、何事もなかったかのように冬二に手を振る。

「じゃあ冬二さん、そのうちに！ 三春はまた明日ねっ」

明らかに三春に向けたほうが『ついで』だった。

（もう、亜里紗ったら……一緒にノッてあげるフユ姉もフユ姉だけど）

「……『とーちゃん』のくせに」

三春がぼそっと呟いたらすぐに、先ほどの亜里紗のようなきつい視線が飛んでくる。

「ああん？ なにか言ったか、三春」

（この変わり身の早さを、亜里紗にも見せてあげたいよ……）

三春は心からそう思った。

「なんでもないよっ。それよりさ、昨日言ってた話、もう解決したから」

なにもアドバイスはくれなかったが、事件のことを説明してしまっていた手前、報告しないわけにはいかなかった。

すると冬二は、とたんに表情を緩めて息を吐く。

「そうだと思ったよ。ふたりして明るかったからな」

ふたりとはもちろん、三春と亜里紗のことだ。

「後ろから見てたら、お花畑が見えたぞ」

「ぷっ、なによそれー」

だが確かに、それくらい明るかったかもしれないと、三春は思う。

（亜里紗だってあんなに怒ってはいたけど、心のなかでは喜んでい
るはずだし）

ちゃんと犯人が見つかったから。

次こそはきつと、正々堂々と戦えるから。

「――昨日、悪かったな」

「え？」

肩を並べてしばらく無言で歩いていると、不意に冬二がそんなふう
に謝った。

「進路のことです、イライラしてたんだ」

「そうだったんだ」

三春が冬二の学校に行っただけで怒っていたようだったから、不
思議に思っていたのだ。「そんなに自分が邪魔なのか」と考えた
ら哀しくて、三春は冬二のプリンにまで手を出してしまった。

（あ、そうだ！ プリンのこと、どうしようっ？）

食い意地の張った冬二のことだ、三春が盗ったと気づいてしまっ
たら、怒り狂うことだろう。さいわい昨日は気づかなかったのか、
今朝になっても「誰が食べたんだ！？」と騒ぎ出すことはなかった
のだが。

先に言ってしまったほうがいいのか、それとも――

「でもさ、『三春なら大丈夫だろ』って思ったのも、本当だ」

迷う三春を待つかのように、告げた冬二の言葉はいつになくやさ
しかった。

「……どういう意味？」

「話を聞いて、すぐ気づいたんだよ。その事件は『三春向き』だっ
て。むしろ三春にしか解けない。だから俺が口を出しても、無駄だ
と思ったんだ」

「フユ姉……」

（言われてみれば、そうかもしれないなあ）

あのビデオを見て、自分以外に犯人を指差せる人がいるとは、三
春自身とも思えないのだ。

「三春はさ、いつも『自分はなんにもできない』って言うけどな、こんなふうには、三春にしか解けない事件だって、世のなかにはたくさんあるんだよ。俺たち四姉妹はひとりずつじゃとても探偵にはなれないけど、それぞれが自分にできることを精一杯やったら、親父たちにも負けない名探偵になれるって、俺は信じてるよ」

冬二の顔が、見られなかった。

言葉だけじゃ、足りなかった。

（でも今のわたしには、ほんの少しだけ『自信』があるから――）
三春はその言葉を、信じることができた。
とめどない想いがあふれた。

「……あのね、フユ姉」

「ん？」

「昨日冷蔵庫にあった、プリンのことなんだけど――」

「なにっ!？」 おまえまさか、プリンから名前が消えた謎を解いたのかっ?」

「へっ?」

【エピローグ】にゃあの日常・後

そこに山があるからのぼるのだと、とある登山家は言った。では、突然頭上にプリンが降ってきたら？　ワガハイは食べずにいられるだろうか、いや、いられない。

——というわけで、ワガハイは偶然入手したプリンを頭（というか、ヒタイ？）に載せたまま、ベストプレイスである看板の上へとやってきた。ちなみに、この頭の上にものを載せて移動する芸は、ワガハイがいちばん得意でありかつ、意外に役立つ芸である。

（——んむむ！？　こ、このプリンは……っ？）

小さなカップに大きな顔をつっこんでなめていたワガハイは、そのあまりにクリーミーな舌触りに驚いた。今までこれほどうまいプリンを食べたことがあっただろうか、いや、ない。

（一体どこのメーカーにゃ？）

食べおわり、カップをぐるりと転がしてみるが、カップそのものにはなにも書かれていなかった。おそらくフタのほうについているのだろう。これは夜中にゴミ箱をあさるしかないか——

（いやいや、待てにゃ？　カップに少しにおいが……）

犬ほどではないが、ワガハイも普通の猫よりは鼻が利く。なにせ名探偵の助手だからな！

……で。

その鼻によると、冬二と三春と秋四のにおいを感じるが……三人も触っていて、こんなにうまいものを食べないとは！　なんたること！　我慢強い子に育ったと喜べばいいのか、欲がなさすぎると哀しめばいいのか……

ワガハイがそんなふうにもいいことに悩んでいると、ふと視界の片隅にあやしげな人影を捉えた。うちの斜め向かいにある電柱からこちらを窺っているようであるが——そうか、内気な依頼者か！　本人は隠れているつもりだろうが、高い位置にいるワガハイ

からはよく見える。どうやら冬二と同じ学校の制服を着ている女子のようだ。

（よしよし、ワガハイが話を聞いてあげるにゃ）

ぴよーんと看板から飛びおりて依頼者（もう決定事項にゃ）のほうに向かうと、最初はびっくりと驚いたような顔をした依頼者も、ワガハイが猫だとわかってやさしい顔つきになる。古風なお下げ髪的女子だった。

「……猫ちゃん、先輩の家の子？」

「にゃー」

（そうにゃー）

「先輩、私のプリン食べてくれたかな」

そう呟いてにこり笑うと依頼者は、動けないワガハイをおいて去っていった。

（『私のプリン』って、ま、まさかにゃ！？）

手作りのプリンだったのだろうか。だとしたら、あのおいしさも頷ける。そしてわが身の危なさも、頷ける。

（ままままままずいにゃー）

相手はきつと冬二だ。

姉妹のなかで最も食い意地のはった冬二だ！

誰かに食べられたとわかったら、なんとしてでも犯人を捜しだろうとするだろう。

（かかかかか考えるにゃ！）

名探偵の助手の名をかけて。

考えるにゃ！

ワガハイは最も集中できる場所である看板の上に戻ると、愛嬌も忘れて考えつづけた。

——その日からしばらく、恐怖で看板からおりられなかった。

こんな、四姉妹の日常をめぐる物語。
そしてそれを見守る、ワガハイの日常の物語は、とりあえずこれ
でお願い。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4544p/>

名探偵の子どもたち ～四姉妹と一匹の日常～

2010年12月29日22時55分発行